

327
1001



始



327

1001

實用口語法

文學士保科孝一著

3

1

327-1001

文學士保科孝一著

實用口語法



東京

會資育英書院發兌

大正
6. 7. 26
内交

序

現在我邦の國語教育においては、東京の中流社會にもつばら行はれる言語がその標準になつて居るから、話方綴方および讀方の教授上、これに關する一般的知識を必要とするのはもとより言ふまでもない。これを組織的に習得するのは決して容易な事ではないが、しかしながら口語法における一般的事實によつてこれを學ぶのが、けだし最善の方法であると信ずる。もつとも口語法を文法の範疇に従つて習得するのは勞多くして効の少いもので、これよりはむしろ實際において必要な一般的知識を鞏固に練習する方が、國語教授上かへつて便利である。地方の小學兒童が話方としてはた綴方とし

て、思想や感情を發表する場合に、かれらに對して特に東京語の一般的知識を必要とするが、しかるに今日のごとくこれに關する組織的練習を閑却しては、たとひ一意自由發表を獎勵しても、見るべき成績のあらはれないのは當然である。また讀方の段階において、講義と稱して普通文の教材を口譯させることが一般の慣例になつ居るが、この場合における穩健にして正確なる口譯は、口語法の知識を基礎としてこれを練習し整理して、はじめてその目的が達せられる。しかるに今日おほくは教授者も兒童もこの知識を缺いてゐるために、口譯はまつたく形式的に陥り、すこぶる不徹底な状態にあるのである。現在我邦の國語教育に於ける實績を見るに、はなはだ不徹底な状態にあるのは、われわれのつねに遺憾とするところ

ろであるが、これも畢竟は標準語に關する一般的知識の缺乏に原由するのである。ゆゑにまづ小學の實際家に對して、特にこれに關する一般的知識の習得を推奨するが、しかしながら現在これを習得するに便利な參考書のないのが一大缺點である。すでに世にあらはれて居るのを見るに、おほくは文法の範疇に従つてこれを説明したものであるから、いまその缺陷を補はんが爲め、本書は文法の範疇を追はず國語教授上實際必要なりと認められる一般的事實をなるべく簡易平明に敘述し、主として教授者の便利に重を置いたのである。

大正六年七月

保科孝一識

實用口語法

目次

第一章 總說

第一節 緒論……………一

第二節 口語法の主要部分……………一〇

第二章 品詞論

第一節 名詞……………一六

第二節 代名詞……………一七

第三節 動詞……………二五

第四節 形容詞……………三〇

第五節 接續詞……………三八

目次

目次	二
第六節 助動詞	三
第七節 助詞	五
第三章 文語法と口語法の關係	
第一節 緒論	一〇七
第二節 動詞	一〇
第三節 形容詞	二四
第四節 助動詞	二七
第五節 助詞	三三
第六節 余論	三八

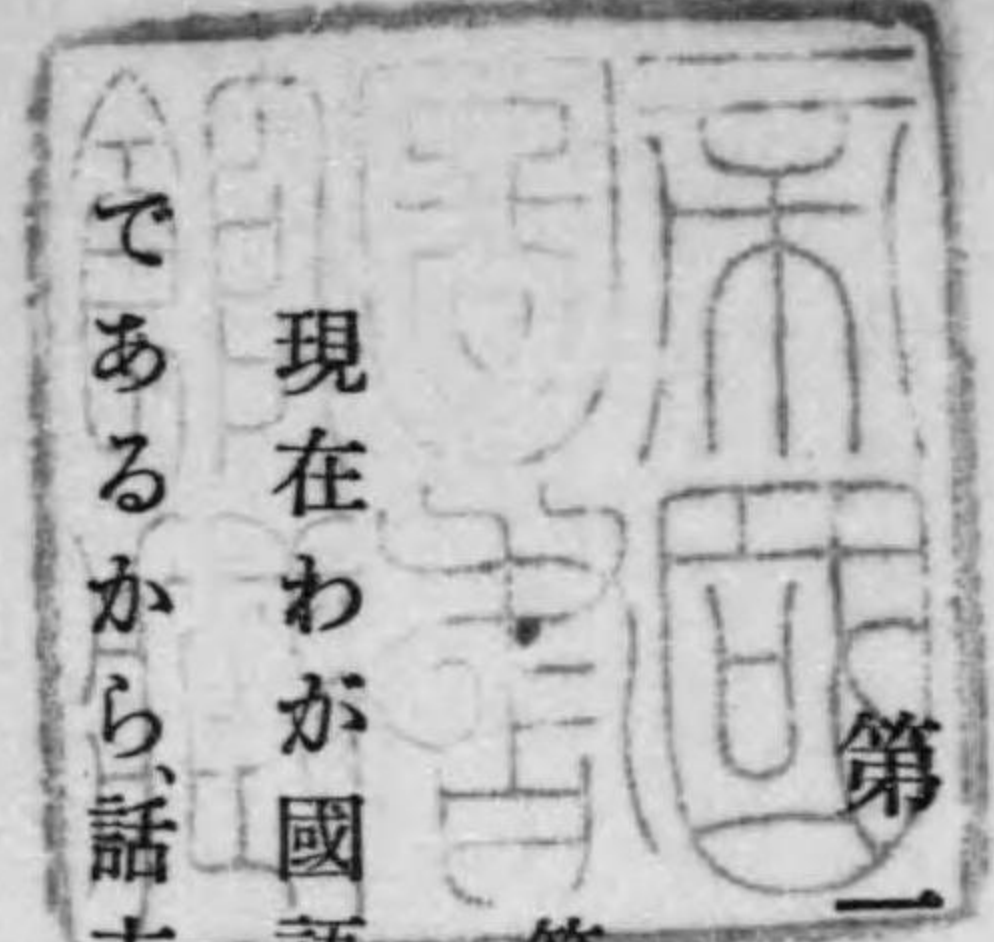
目次終

實用口語法

文學士 保科孝一 著

第一章 總說

第一節 緒論



現在わが國語教育においては、大體東京語を以て標準として居るのであるから、話方や綴方のごときは、これによつて練習するのが當然である。しかるに現在の東京語は發音上より見て、はた語彙や文法上より見て、はなはだ曖昧なもので、種々の疑問が存在する。ゆゑに話方や綴方の教導上いかなる方針によるべきかについては、教授者がしばし

ば迷はざるを得ない。ことに文法上における正確なる一般的知識を有たなければ、その教導上少からざる困難を感じるのである。

文法上から今日の東京語に關する一般的知識を體得せんとする場合には、まづあらかじめ關東方言と關西方言とは文法上いかなる相違を有するかを心得ておく必要がある。元來今日の東京語は關東方言の上に發達したものであるが、明治維新後各地方からこゝに移住して來たものが多いので、言語上に少からざる混和を生じた。ことに文法上關西方言に屬する種々の形式が、從來慣用のものとともに並用せられるやうになつたものも少くない。この混和が東京語を體得せんとするものに對して一層の困難を感じしめて居る。右のやうな事情があるから關東方言と關西方言とは文法上いかなる相違を有するかをあらかじめ知る必要があるわけであるが、それも重要なものはあまり

澤山ないので、大體左の數ヶ條を心得て居ればよろしい。

- 一、打消の形式は雨ガ降ラナイ、雨ガ降ラナカッタ、人ガ來ナイ、人ガ來ナカッタ、といふやうに、ナイナカッタを動詞に結び付けるのが關東方言の慣用であるが、關西方言においては、雨ガ降ラン、雨ガ降ラナンダ、人ガ來ナイ、人ガ來ナンダ、といふやうに、ナンダを動詞に結び付けるので、この區別は兩方言の間に判然と存在して居る。
- 二、命令の形式は四段活用以外の動詞に、ロを結びつけて、僕ニ任セロ、早く起キロ、コレヲ見ロ、といふやうに言ひあらはすのが關東方言の慣用であるが、關西方言においては、コレヲ見イ、早く起キイ、試験ヲ受ケイ、といふこともある。
- 三、未來の形式は四段活用以外の動詞には、ヨウを結びつけて、試験ヲ受ケヨウ、朝早く起キヨウ、明日行ツテ見ヨウ、といふのが、關東方言の慣用であるが、關西方言においては、ウを結びつけて、試験ヲ受ケウ、朝早く起キウ、明日行ツテ見ウ、と言ひあらはす地方が多い。すなはち前者は關東東北地方は勿論、東海北陸近畿地方にまで廣がつて居るし、後者は中國・山陰・九州および四國地方におほく用ゐられて居る。しかし近來は前者が關西方言の領域に進入しつゝ、ある傾向が一般に存在する。

四、形容詞の第十活用形は、善ク來タ、暑クナツタ、烈シク降ル、といふやうに言ひあらはすのが關東方言の慣用であるが、關西地方では善ク來タ、暑クナツタ、烈シク降ル、といふやうに、これを長音に用ゐて居る。もつとも東京語においてもゴザイマスに接続するときは、オ早ウゴザイマス、寂シウゴザイマス、とかならず長音に言ひあらはす慣例である。またゾンジマスに接続するときにも、有リガタウゾンジマス、オメデタウゾンジマス、と言ひあらはすことがある。

五、指定の助動詞には楠正成ハ忠臣デ足利尊氏ハ逆臣ダ、コレハ梅デアレハ櫻ダ、といふやうにデ、ダを用ゐるのが關東方言の慣用であるが、關西地方では楠正成ハ忠臣デ足利尊氏は逆臣ヂヤ、コレハ梅デアレハ櫻ヂヤ、と言ひあらはして居る。したがつて一方では推量にダラウを用ゐ、一方ではヂヤラウを用ゐる。

六、波行四段の活用の動詞が過去の助動詞のテ、タに接続するとき、關東方言では買ツテ、買ツタ、逢ツテ、逢ツタといふやうに促音に言ひあらはすが、しかるに關西方言では買ウテ、買ウタ、逢ウテ、逢ウタと長音に用ゐて居る。

七、佐行四段活用の動詞が過去の助動詞テ、ダに、接続するとき、關東方言では別に發音上の變化を惹起すことがないが、關西方言では殺イテ、殺イタ、指イテ、指イタ、出イテ、出イ

タといふやうに「シ」を「イ」に變化する地方が少くない。

八、關西方言には進行現在として食ヒヨル、見ヨル、現在として食ツトル、見トルといふ形式が存在するが、關東方言にはこの形式の區別がない。關西地方では猫ガ死ニヨル、猫ガ死ンドル、との間に判然たる區別があるが、關東地方には猫ガ死ンデルといふ形式の外、進行現在をあらはすものがない。しかし雪ガ降ツテルといふ形式は進行現在にも現在にも用ゐられるので、つまり關西地方におけるやうな判然たる區別がその用法上に存在しない。

九、東京語では芝居が見タイ、水ガ飲ミタイ、馬ニ鹽俵ガ積ンデアリマシタ、といふやうに動作の目的になる名詞に助詞の「ガ」を添へるのが普通の用例であるが、關西地方では助詞の「ヲ」を結びつけて芝居ヲ見タイ、水ヲ飲ミタイ、馬ニ鹽俵ヲ積ンデアリマシタ、といふやうに言ひあらはして居る。

十、文語上二段および下二段活用の動詞を、關東地方の口語では、上一段および下一段活用に用ゐて居るが、關西方言の系統に屬する九州や四國地方には、これらの動詞を依然としてひかしのまゝ上二段および下二段に用ゐて居るところがある。しかしこれは年を追うて關東地方の慣用に近づきつゝあることが明な事實である。

以上は關東方言と關西方言との間に存在する文法上重なる相違であるが、東京語は關東方言の系統に屬するものであるから、これを東京語と關西地方の言語との相違とも見ることが出来るのである。ゆゑに、東京語を標準として國語教育を行ふ場合に、東京語を絶対の標準として進むべきか、あるひはある程度まで關西地方の言語における慣用を斟酌すべきかが一大問題になるが、今日の東京語を以て國語教育上の標準とする場合に、幾分の斟酌を必要とするのは言ふまでもない。たゞいかなる程度までこれに斟酌を加へるべきか、問題であるが、たとへば打消の形式のごときは東京語におけるものを骨子としてこれに關西方言の慣用を斟酌する必要があらう。雨が降ラナイ、僕ハ行カナイ、といふ東京語の打消とともに、關西方言の雨が降ラン、僕ハ行カン、といふ形式を混用する方針を取るのが、今日のところもつとも時宜に

適した方法と思ふ。たゞし過去の打消として雨が降ラナンダ、僕ハ行カナンダ、を並用することは何うであらう。現在の國定教科書が過去の打消に東京語のみを單用して居るのは、當を得たものと認める。また東京語で今年ハ是非試験ヲ受ケナケレバナラン、明日ハ早く起キナケレバナラン、といふ場合に、關西地方では今年ハ是非試験ヲ受ケネバナラン、明日ハ早く起キネバナラン、と言つて居るが、これは今日の口語文にすこぶる豊富にあらはれて居るから、もはや並用を許さなければなるまいかと思はれる。混用もしくは並用は主義としてなるべく避けたいのであるが、今日のやうな過渡時代においては、しばらくこの方法を取るのも實は止を得ないことであらう。

つぎに命令の形式は「ロ」と「ヨ」を結びつける場合を並用したい。「イ」を結びつける場合は、加行變格の外これを方言として排斥するが當然で

あらう。現在の國定教科書では、「ヨ」を結びつけた形式を主として用ゐ、「ロ」を結びつけたのがほとんど見えないが、今日の東京語を標準とする場合には、これを並用するのが當然である。未來の形式は東京語の慣用によるべきであるし、形容詞の第一活用形や指定の助動詞も東京語に従ふべきものであらう。波行四段活用の動詞が過去の助動詞テ、タに接續する場合において、東京語と關西方言とはその慣用を異にするが、しかしいづれもひろく行はれて居るものであるから、並用する方針を取るのが得策であらうと信ずる。佐行四段活用の動詞が、過去の助動詞テ、タに接續する場合に發生する發音上の變化は、關西地方の一部に存在するもので、これは將來の標準語として許すべからざるものである。進行現在の形式を將來の標準語に許すべきものかどうかは、今日のところ容易に決定することが出來ないから、しばらく地方の慣用

に従ふのが策の得たものであらう。上下二段活用の動詞はその慣用せられる範圍が比較的狭いから、これも東京語の用例に従つて上下一段活用に統一して差支ない。

以上は今日の東京語に對して、關西方言の慣用をいかなる程度まで斟酌すべきを説明したのであるが、この程度については學者の間に多少の異論もあらう。しかしながら大體は右の程度においてほゞ一致して居ると信ずる。ゆゑに話方や綴方においては、大體右の方針によつてこれを練習しこの標準に相違するものは訂正して差支ない。今日のところ標準語と方言との區別がはなはだ曖昧であるから、發音の矯正や言語の練習において實際家が少からざる困難を感じて居るのであるが、しかし、關東方言と關西方言との間に存在する文法上の主要なる相違、東京語に對していかなる程度までこの間の相違を調和すべ

をかを攻究すれば、その困難の幾部分を避けることが出来るので、話方や綴方の実績をおほいに擧げることとは決して至難の業でない。

第二節 口語法の主要部分

口語における法則や慣用を文法的に習得することは、多くの場合において種々の不利や困難がある。今日普通一般に行はれて居る教科書により、すべて文法上の範疇を追うてこれを習得しようとするれば、文法として學ぶやうになるから、自然實益に遠ざかる恐がある。小學校の實際家が話方や綴方の教授上、口語法の確實な知識を有する必要があるのは、いまあらためて言ふまでもないが、しかしかならずしも文法上の範疇を追うてこれを學ぶ必要はない。すなはち文法を文法として學ぶ必要は、毫もないので、實際話方や綴方の教授上、必要な部分を確

實に、習得すればそれで宜しいのである。日本文法は西洋文法とその性質を異にするので、實際知らなければならぬ部分があまり多くない。しかるに今日では西洋文法を模範としてそれと同じ範疇においてこれを教授しようとして居るから、實際話方や綴方において必要のないものも、いきほひ文法を文法としてこれを學ばなければならぬやうになるのである。一體われわれが文法を學ぶ必要を感じて居るのは、文章を作成する場合においてである。もし文法の一般的知識がなければ種々の誤謬を生ずるし、また思想や感情を口述する場合においても同様であるが、これらの誤謬や缺陷を避けるために文法を學ぶものとすれば、この目的に對して必要な部分をもつばら練習すれば宜しいのである。思想や感情を言ひあらはし書きあらはす場合に、なんらの誤謬や缺陷を生ずる恐のないものも、文法の範疇から當然の結果と

してこれを學ぶ必要はない。文法を文法として學ぶ場合には、小學の實際家といへどもなら誤謬や缺陷を生ずる恐のない事實も、文法上から知つて居る必要があらう。しかし話方や綴方の教授上に資せんがため口語法を學ぶ場合には、實際この目的に對して必要な事實を知ればそれで宜しいので、文法の範疇に屬するすべての事實をしひて習得する必要はない。勿論口語法の一般的知識は、口語文を讀解する場合にも必要であるし、普通文を口譯する場合にも必要であるが、ならばその必要な部分を確實に習得すれば、小學の實際家に取つて不足がない。ところがこれまで文語法でも、口語法でも文法を文法として學ぶやうになつて居るので、實際必要のない部分に力を注ぎ、かへつて必要な部分を輕んずるやうな傾があつて、あまり實益になつてゐない。これを要するに、小學の實際家が話方や綴方の教授上に資せんがた

め、口語法を學ぶ場合には、實際必要のある部分すなはち東京語とその地方語との間における文法上の相違を主として練習すれば宜しい。これらの相違はおもに動詞・形容詞・助動詞・接續詞および助詞の形式や用法に存在する。副詞の用法にも無論相違はあるが、それは語彙として學べばよろしいので、文法上から學ぶ必要はない。つまり小學の實際家は話方や綴方の教案を作成し、あるひは兒童の成績を訂正批評するため、東京語と地方語との間における文法上の相違を確實に習得して置く必要があるので、この必要を充す範圍において、東京語を學べば澤山である。この目的に對しては文法を文法として學ぶ必要は毫もない。

小學兒童をして東京語に練熟せしめるには、文法上の形式や用例を豊富に授け、たえず練習して地方語との間における相違を明確に了得

させるやうにしなければならぬ。もし地方における小學兒童がこの練習を怠つたならば、おそらく義務教育を終了しても、なほ東京語によつて正確に自由に思想や感情を發表することが困難であらう。地方における村落學校の綴方成績を見るに、東京語と地方語を混用し、ほとんどその意味を了解するに苦むやうなものが少くない。綴方教授上から見れば、かゝる成績は嚴重に訂正して純粹な東京語によつてこれを發表し得るやうに誘導しなければならぬのは言ふまでもないが、かゝる成績を訂正するには、標準語と地方語との間における發音上語彙上および文法上の相違を調査攻究し、熱誠な努力と不斷の忍耐をもつて兒童を誘導することがもつとも必要であるが、これまでこの點の注意が一般に行渡つてゐない、教員に、東京語の知識があまり豊富でないから、東京語と地方語との間における相違を了得し、組織的の教案に

よつてたえずこれを練習することが困難であるやうに見える。しかし一方から見ると、これは多少難きを教員に責める傾もある。といふのはこれまでこの目的に當てはまるやうな東京語の練習書がない。口語文典は多少存在するがおほくは文法を文法として學ばせるやうになつて居るので、小學の實際家がかゝる参考書によつて東京語を學ぶ場合には、おそらく種々の困難があるであらうと思ふ。ゆゑにこの目的に當てはまるやうなきはめて簡單にして實用的な東京語法の一斑を述べる積で、本書を書き綴つて見たのである。

第二章 品詞論

第一節 名詞

事物の名稱が文法上名詞として取扱はれることは、文語においても口語においても別に變りはないが、たゞ口語においては人物を代表する名詞に、その用例上多少注意すべきものがある。すなはち、

一、人物を代表する名詞には、つぎのごとく「ガタ」「ドモ」「タチ」「ラ」を附加へて複數を表示し、あるひは待遇を表彰し、あるひはその意味をすこしく引緩るめることがある。

會員ガタ 奥様ガタ 女ドモ 車夫ドモ 學生タチ 子供ラ

二、姓名または人物を表彰する名詞には、つぎのごとく「サマ」「サン」「クン」を附加へて敬意を表示することがある。

松平サマ 藤原クン お花サン 御姫サマ 御子サン

以上の二項が地方によつてその慣用に多少の相違がある。兒童の綴方成績を見るにこれらの用例においてしばしば、地方の通用語を混用して居ることがあるから、訂正整理の際ふかくこれに注意してその方言的色彩を除き去らなければならぬ。

第二節 代名詞

代名詞には地方によつて種々のものが存在するし、東京語においても上流社會に行はれるものと、下等社會に行はれるものとの間に、少からざる相違がある。現在東京の中流社會にもつばら用ゐられる人代名詞を列擧して見ると左の通、

稱定不	稱他	稱對	稱自	單
			數	
ダレ ドナタ ドノカタ	アレ、アノカタ コレ、コノカタ ソレ、ソノカタ	君 オマヘ アナタ	自分 僕 ワタクシ	ワタクシ ワタクシ ワタクシ
ダレ ドナタ ドノカタ	アレ コレ ソレ	君 オマヘ アナタ	自分 僕 ワタクシ	ワタクシ ワタクシ ワタクシ
ダレ ドナタ ドノカタ	アレ コレ ソレ	君 オマヘ アナタ	自分 僕 ワタクシ	ワタクシ ワタクシ ワタクシ

人代名詞が複数を形作るのに二種ある。その一はワレ〜のごとく同じ語を疊むのであるが、たゞしダレ〜、メイ〜、ジブン〜等は

一人々々を數へるので、複数を表示するものでない。その二は「ガタ」チ「ドモ」ラを附加へるのであるが、これも純粹な複數でなくして、待遇の關係をあらはし、あるひは集團を意味して漠然たらしめるものである。つぎに指示代名詞を擧げて見ると左の通、

角方	所場	物事	近稱	中稱	遠稱	不稱定
コッチ コチラ	ココ ココラ	コレ コレラ コチラ	コレ コレラ コチラ	ソレ ソレラ ソチラ	アレ アレラ アチラ	ドレ ナニ ドチラ
ソッチ ソチラ	ソコ ソコラ	ソレ ソレラ ソチラ	ソレ ソレラ ソチラ	アレ アレラ アチラ	ドレ ナニ ドチラ	ドレ ナニ ドチラ
アッチ アチラ	アソコ アソコラ	アレ アレラ アチラ	アレ アレラ アチラ	アレ アレラ アチラ	アレ アレラ アチラ	ドレ ナニ ドチラ
ドッチ ドチラ	ドコ ドコラ	コレ コレラ コチラ	コレ コレラ コチラ	ソレ ソレラ ソチラ	アレ アレラ アチラ	ドレ ナニ ドチラ

指示代名詞について二三の注意すべき事項を擧げて見ると、

一、指示代名詞に「ラ」を結びつけると、集團または周邊をあらはすか、もしくはその意味を漠然たらしめる。

二、疊語のコレく、ソレく、ドレく、ドコく、ナニく、のごときも、複数の意味を表示するのでなくして、たゞ繰返すだけの意味である。またドコソコ、ソココ、アチラコチラ、アツチコツチ等の二個の代名詞を結合したものは、その意味を漠然とあらはすもので、地方によつて種々の形式があるから、これについては甚深の注意を要する。

三、コチラ、ソチラ、アチラ、ドチラはコツチ、ソツチ、アツチ、ドツチよりも上品な語である。

右の人代名詞および指示代名詞は、待遇によつて、それく用法が異なるのは、言ふまでもない。方角をあらはす指示代名詞のコチラ、ソチラ、

アチラ、ドチラにサマを附けて人代名詞に用ゐることもある。代名詞について、話方や綴方教授上もつとも深く注意を要するのは、待遇の關係であるが、それについてすこしく説明しよう。

元來代名詞は男女老少によつて、用例の異なるのは言ふまでもないが、待遇によつても種々の約束を生ずる。例へば(一)甲と乙が同等の地位に居る場合には、たがひに敬意を表する必要がないから、對話の際に用ゐられる人代名詞ワタシ、僕、自分、君、アレ、コレ、ソレ、ダレ等である。この場合には敬意を表する助動詞、接頭辭、接尾辭等を用ゐない。

ワタシ、モ明日鎌倉へ行ク。

僕、ハモウコレヲ讀ンデシマッタ。

自分、ハモトヨリ不賛成。

君、モ一所ニ行キ給ヘ。

アレ、モ來ルノカ。

「君モ行キマスカ」といふのは敬意を表するのでなくして、たゞ丁寧に言

ひあらはすのである。つぎに(二)甲よりも乙が目上である場合には、甲は乙に對して敬意を表さなければならぬから、人代名詞としてワタクシ・ワタクシドモ・アナタ・アナタガタ等を用ゐ、第三者が甲よりも目上であれば、アノカタ・コノカタ・ソノカタ・ドナタ・ドノカタ等を用ゐる。

ワタクシモ御供致シマセウ。

アナタハ何時御歸ニナリマシタ。

アノカタモコノカタモ今日始メテオ出ニナリマシタノデゴザイマス。

コレハドノカタノデゴザイマスカ。

目上の人に對しては、代名詞のみならず、名詞・數詞・動詞・形容詞・副詞および助動詞等すべて敬意を表するやうに用ゐなければならぬので、これが口語文において、もつとも困難なことである。これに地方の小學兒

童に對してすこぶる困難なものである。たとへば、

アナタノ御羽織ハ大層オ美シウゴザイマスガド、チラデ御求メニナリマシタカ。

オ幾ッデモオ早クオ取リアッパセ。

(三)甲よりも乙が目下であれば、甲は乙に對して敬意を表する必要がないから、代名詞にワタシ・オマヘ・アレ・コレ・ソレ・ドレ・ダレ等を用ゐる。

この場合には勿論敬語の助動詞を用ゐる必要はないが、婦人などは丁寧に言ひあらはすために、マスやデスを用ゐる。即ち、

コレハオマヘニ上ゲマス。

ワタシノハコレデセウ。

(四)甲がことさらに一段地位を下つて乙に對することがあるが、この場合には甲がすべて謙遜の意を含む言語を用ゐる。代名詞にはワタクシ・ワタクシドモ、動詞には「頂戴」「拜見」「伺フ」「參上」等を用ゐる。たとへば、

ワ、タ、ク、シ、ハ、モ、ウ、頂、戴、イ、タ、シ、マ、セ、ン。
 ワ、タ、ク、シ、ド、モ、デ、モ、豫、テ、ソ、ノ、事、ハ、承、ッ、テ、居、リ、マ、ス。
 コ、レ、ガ、平、生、口、癖、ニ、サ、ウ、申、シ、テ、居、リ、マ、ス。

以上は待遇關係について、その一斑を述べたのであるが、日用文などになると、これが一層複雑して來るから、綴方教授上つねにこの點に深く注意しなければならん。一體代名詞は地方により階級によつてその種類にいろ／＼なものがあるのみならず、待遇の關係によつてこの用法がはなはだしく複雑して居るので、これを地方の小學兒童に飲み込ませて立派に思想を發表させることは決して容易な業でない。ゆゑに以上に例示した人代名詞や指示代名詞を確實に了得せしめ、これを自由に使用し得るやうに練習を積まなければならん。

第三節 動詞

口語の動詞には四段活用、上一段活用、下一段活用、カ行變格活用およびサ行變格活用の五種ある。地方の方言によると、これに多少の異同を見るのであるが、東京語におけるものは、まづ大體右の五種である。その活用形を見るに、

四段活用

	カ	ガ	サ	タ	ナ	ハ
第一活用形	カ	ガ	サ	タ	ナ	ハ
第二活用形	キ	ギ	シ	チ	ニ	ヒ
第三活用形	ク	グ	ス	ツ	ヌ	フ
第四活用形	ク	グ	ス	ツ	ヌ	フ
第五活用形	ケ	ゲ	セ	テ	ネ	ヘ

ネ	タ	ザ	サ	カ	ア	
尋	當	交	任	明	心得	
ネ	テ	ゼ	セ	ケ	エ	第一活用形
ネ	テ	ゼ	セ	ケ	エ	第二活用形
ネル	テル	ゼル	セル	ケル	エル	第三活用形
ネル	テル	ゼル	セル	ケル	エル	第四活用形
ネレ	テレ	ゼレ	セレ	ケレ	エレ	第五活用形

下二段活用

ワ	ラ	ヤ	マ	バ
居	下	報	試	延
キ	リ	イ	ミ	ビ
キ	リ	イ	ミ	ビ
キル	リル	イル	ミル	ビル
キル	リル	イル	ミル	ビル
キレ	リレ	イレ	ミレ	ビレ

上一段活用

ハ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	
干	恥	落	煎	達	過	起	射	
ヒ	チ	チ	ジ	シ	ギ	キ	イ	第一活用形
ヒ	チ	チ	ジ	シ	ギ	キ	イ	第二活用形
ヒル	チル	チル	ジル	シル	ギル	キル	イル	第三活用形
ヒル	チル	チル	ジル	シル	ギル	キル	イル	第四活用形
ヒレ	チレ	チレ	ジレ	シレ	ギレ	キレ	イレ	第五活用形

ラ	マ	バ
祈	編	飛
ラ	マ	バ
リ	ミ	ビ
ル	ム	ブ
ル	ム	ブ
レ	メ	ベ

ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
誂	誂	誂	誂	誂	誂
ヘ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ
バ	バ	バ	バ	バ	バ
並	並	並	並	並	並
ベ	ベ	ベ	ベ	ベ	ベ
マ	マ	マ	マ	マ	マ
改	改	改	改	改	改
メ	メ	メ	メ	メ	メ
ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ
絶	絶	絶	絶	絶	絶
エ	エ	エ	エ	エ	エ
ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ
恐	恐	恐	恐	恐	恐
レ	レ	レ	レ	レ	レ
ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ
植	植	植	植	植	植
エ	エ	エ	エ	エ	エ

カ行變格活用

カ	カ	カ	カ	カ	カ
來	來	來	來	來	來
コ	コ	コ	コ	コ	コ
キ	キ	キ	キ	キ	キ
クル	クル	クル	クル	クル	クル
クル	クル	クル	クル	クル	クル
クレ	クレ	クレ	クレ	クレ	クレ

サ行變格活用

サ	サ	サ	サ	サ	サ
爲	爲	爲	爲	爲	爲
セ	セ	セ	セ	セ	セ
シ	シ	シ	シ	シ	シ
スル	スル	スル	スル	スル	スル
スル	スル	スル	スル	スル	スル
スレ	スレ	スレ	スレ	スレ	スレ

注意 第一活用形を將然形、第二活用形を連用形、第三活用形を終止形、第四活用形を連體形、

第五活用形を已然形ともいふ。

以上は東京語における口語動詞の活用であるが、漢語および國語の名詞を動詞として用ゐるときに、文語では、すべて佐行變格に活用させるのが慣例であるが、口語に於ては、その慣用が語により、人により、地方によつて區々で、いまだ一定しない。これは畢竟過渡時代にあるからである。たとへば、

勉強、尊	セシ	シ	スル	スル	スレ
察	シ	シ	シル	シル	シレ
案	ジ	ジ	ジル	ジル	ジレ
議	サ	シ	ス	ス	セ
解	セ	セ	セル	セル	セレ

の如く、四種の形式が並び行はれて居る。

右の動詞を命令に用ゐるときに、四段活用は第五活用形そのままで命令になるが、その他の動詞は第一活用形にロ、ヨ、イを結び付ける。たとへば、

早く起キ、ロ。

試験受ケテ見、ロ。

私ニ任セ、ヨト申シマシタ。

明日行ツテ來、イ。

ただし、呉レルと云ふ動詞は下一段であるが、呉レロ、呉レヨ、また呉レとも用ゐる。なほこの外命令の職分を盡すものに、左の數種ある。

一、オ讀ミナサイ　オ起キナサイ　御覽ナサイ

二、オ出下サイ　オ送下サイ　オ受下サイ

三、オ休アソバセ　オ召アソバセ　オ歸アソバセ

四、行ツテイラツシヤイ　見テイラツシヤイ

五、見タマヘ　來タマヘ

六、オ讀ミ　オ出デ　オ上リ　オ休ミ

また敬讓動詞と言つて、それ自身において尊敬もしくは謙遜の意味をあらはすものがある。たとへば、尊敬の意を含んで居るものに、

アガル(食フ、飲ム、訪問)　アソバス(爲ル)　イラツシヤル(居ル、來ル、行ク)

オツシヤル(言フ)　オボシメス(思フ)　下サル(與ヘル)　ナサル(爲ル)

メシアガル(食フ、飲ム)　メス(呼ブ、着ル、來ル)

アナタハオ魚ヲメシアガリマスカ。

ソナコトヲ遊バシテハイケマセン。

ドウ思召シテイラツシヤルカ分リマセン。

つぎに謙遜の意を含んで居るもの、また丁寧に言ひあらはすものに、

左のごとき動詞がある。

アゲル(與へル) イタダク(貰フ) イタス(爲ル) ゴザル(有リ) ウカガ
フ(聞ク、訪問) カシコマル(承知) サシアゲル(與へル) タベル(食フ)
マキル(行ク、來ル) モウス(言フ) 申上ゲル(言フ)

漢語には謙遜の意をあらはす動詞が澤山ある。たとへば「拜見」「拜觀」「拜
借」「頂戴」「參上」「進上」等で、なかには丁寧に言ひあらはす場合にも用ゐら
れる。

私モ御一所ニ拜見イタシマス。

一昨日御寶物ヲ拜觀シマシタ。

御遠慮ナク頂戴シマス。

私ハ參上致シマセン。

つぎに「靜デ・靜ダ、穩デ・穩ダ、奇麗デ・奇麗ダ、上等デ・上等ダ」等の語を形容
動詞といふ。たとへば、

海が大層靜デ結構デゴザイマス。

今日ハ波ガホントニ靜ダ。

今日ハスコシ暖デ心持ゴヨイ。

明日モキツト暖ダラウ。

コノ品ハ上等デ價モ安イ。

コノ部屋ハ上等ダ。

第四節 形容詞

口語の形容詞には、つぎのやうな各種の語彙があつて、みな同じやう
に活用する。

一、白イ 黒イ 寒イ 暖イ 遠イ 近イ

二、寂シイ 悲シイ 嬉シイ 苦シイ 恐ロシイ

三、冷ッコイ 滑ッコイ 油ラッコイ

四、怒リッポイ 黒ッポイ 忘ッポイ

- 五、口巾ツタイ 平タイ 腫ボツタイ
- 六、スツバイ
- 七、アブナイ キタナイ
- 八、男ラシイ 女ラシイ 子供ラシイ
- 九、素晴ラシイ 鬱陶シイ
- 十、女々シイ 遠々シイ 重々シイ 忌々シイ 馬鹿くシイ。

語根	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
善	ク	イ	イ	ケレ
長	ク	イ	イ	ケレ
重	ク	イ	イ	ケレ
新	ク	イ	イ	ケレ
苦	ク	イ	イ	ケレ

語根	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
寂	ク	イ	イ	ケレ
冷	ク	イ	イ	ケレ
荒	ク	イ	イ	ケレ
平	ク	イ	イ	ケレ
酸	ク	イ	イ	ケレ
危	ク	イ	イ	ケレ
男	ク	イ	イ	ケレ
忌	ク	イ	イ	ケレ

注意 第一活用形を副詞形、第二活用形を連體形、第三活用形を終止形、第四活用形を已然形ともいふ。

また左の如き語彙は、準形容詞として取扱はれる。

- 一、静ナ 明ナ 僅ナ 暖ナ 穩ナ 長閑ナ
- 二、聊ナ 可笑シナ 小サナ

- 三、手狭ナ 氣輕ナ 眞赤ナ 待遠ナ
- 四、コンナ ソンナ アンナ ドンナ
- 五、コノ様ナ ソノ様ナ
- 六、面白サウナ 降りサウナ
- 七、立派ナ 綺麗ナ 上等ナ 大抵ナ 案外ナ
- 八、御尤ナ 御盛ナ 哀ナ

静・明・暖・確	第一活用形	第二活用形
聊・可・笑・小	○	ナ
手狭・氣輕	=	ナ
ソノ様・コノ様	=	ナ
面白サウ・降りサウ	=	ナ

立派・上等	=	ナ
哀	=	ナ

注意 第一活用形を副詞形、第二活用形を連體形といふ。

準形容詞の第二活用形を聊ノコト、氣輕ノ人、上等ノ品物、大抵ノ場合、御盛ノコトといふやうに用ゐることもあるが、しかし、普通には聊ナコト、氣輕ナ人、上等ナ品物、大抵ナ場合、御盛ナコトといふ方を用ゐる。また場合によつては靜ダコト、氣輕ダコト、立派ダコトといふ用例があるが、これは準形容詞でない。ゆゑに靜ダ波、氣輕ダ男、立派ダ家といふやうには用ゐないが、もし用ゐる人があればこれは方言である。

普通の形容詞の第一活用形から、助詞のテ、テモに連續するとき、高クツテ、高クツテモ、辛クツテ、辛クツテモと促音に言ふことがあるし、ゴザイマスに連續するときは、オ早ウゴザイマス、オ暑ウゴザイマス、寂シ

ウゴザイマスと長音に言ふのが慣例である。オ早ウアリマス、オ暑ウアリマス、寂シクゴザイマス、痛クゴザイマスなどといふ形式は絶対に用ゐない方が宜しい。また第四活用形の宜ケレバ、苦シケレバを宜ケリヤ、苦シケリヤといふやうに發音することもあるが、書き綴る場合には、やはり宜ケレバ、苦シケレバの形式に據らしめる方がよろしい。

第五節 接續詞

接續詞の用法は綴方において、もつとも重要なものである。小學低學年の兒童が文や語句をたくみに連續することが出來なくして、はなはだ錯雜した不完全な文章を綴る弊があるが、これは接續詞の用法に熟練しないことがおほいに與つて居る。普通の口語文に用ゐられる接續詞を見るに、

又 又ハ 或ハ 且ツ 及ビ 猶 猶又 其上 然シナガラ 然
 シ 然ルニ シカノミナラズ ノミナラズ ソレノミナラズ ケ
 レドモ ソレダカラ ソレデスカラ ダカラ デスカラ ソシテ
 サウシテ サウスルト スルト ソコデ ソレデ トコロデ ソ
 レデハ トコロガ ソレナラ ソレカラ

等が主要なもので、なほこのほか助詞によつて結びつけるものも澤山ある。

接續の状態はかならずしも同一でないのもつばら語と語とを結び付けるものともつばら句や文を結び付けるものもある。意味の方から見ると、原因結果の關係を有する事實を接續するものもあり、まったく相背反する事實を接續するものもある。また單に上の事柄を受けて、下の事柄に接續するものもある。意味の上からはあまり必要で

ないが、修辭上からかゝるく接続するものもある。それらの用例をよく練習すれば、かならず綴方の面目を一新することが出来ると思ふ。つぎに、その用例を擧げて見よう。

山ヲ越エ、又谷ヲ渡ツテ來タ。

大佐、又、ハ少將。

葡萄酒カ、或、ハウイスキーナラ何ウダラウ。

コレマデ随分多忙デアリ、且、ツ身體モ弱カッタ。

イロ／＼御馳走ヲ頂キマシテ、其上ニ御土産マデ有リガタク御座イマス。

英佛獨及、ビ露ノ四ヶ國へ差遣ハサレタ。

手紙デ委シク言ツテヤリマシタガ、猶會ツテヨク話シマス。

コノ學說ハ至極穩當デアルガ然シ、ナガラ、少シ不完全ダ。

昨日來ル筈デアツタガ、然ルニ、手筈ガ少シ違ツテ遅レタ。

物價ガ安イシ、氣候ガヨイシ、ハミナラズ、交通ガ便利ダ。

今度ハ随分勉強シマシタ、ケレドモ、ヤツバリ駄目デシタ。

又失敗シタノカ。ダカラ、始メ注意シタノニ。

始ハ土ノ中ニ居マシタガ、暗クテ大層困リマシタ。ソコデ、仲間ト一所ニナツテ土ノ外

へ出マシタ。スルト、ダン／＼仲間ガフエテ來マシタ。ソレカラ、マタ少シタツテ私ド

モハ大層廣イトコロへ出マシタ。

トコロガ、間モナク鳥ノ仲間モ獸ノ仲間モ疲レテシマツテ仲直ヲシマシタ。ソシテ、蝙蝠

ヲ惡クンデ、仲間ハヅレニシマシタ。ソレデ、蝙蝠ハコノ時カラ晝飛ビマハルコトガ

出來ナイ様ニナリマシタ。

ソレマデ決心シタノカ。ソレナラ、斷然ヤツテ見ルサ。

惡イ猿ニ殺サレテオマケニ柿ヲ皆取ラレテシマツタノダ。ツイテ、ハ、コレカラ君タチ

ト一所ニ仇ヲ取ツテヤリタイト思フノダ。

ソナナコトハ決シテアルマイト思ツタ。トコロガ、不思議ナコトガ起ツテ來タ。アノ

人ガ來ナイノカ。ソレデ、ハ、駄目ダラウ。

以上は本來の接続詞によつて接続したのであるが、つぎに、助詞を用ゐた例を擧げて見ると、

随分交通モ便利デアルシ、何ノ不自由モナイ。
心持ガ悪ケレバ、薬ヲ飲メ。

日ガ暮レテ、道ガ遠イ。

明日仙臺ヘ行クガ、何モ用ハナイカ。

ソレカラ少シ行クト、道ガ平ニナリマス。

アンナニ世話ニナツテ居ルノ、ニ、何トモ思ハナイ。

試験ガ近クナツタノ、デ、ナカク、忙シイ。

モウ少シタツト閑ニナルカラ、遊ニ來イ。

ドンナ事情ガゴザイマセウトモ、約束ハ約束デス。

イクラ働イテ、モ、追付カナイ。

寝メラレタモノハ、油斷ハ出來ン。

イロク、取込ミマシタ、メ、ニ、ツヒ延引シマシタ。

また接續詞は普通談話の際しばしばその省略された形式が用ゐられる。たとへば、

何モ御心配ノコトハアリマスマイ。デスガ、御用心ナサラナイトイケマセン。

随分暑イネ、デ、モ、臺灣ヨリハマシダラウ。

種々雑多ナ理由ガゴザイマス。デ、ソノ結果ヲ見ルト……

行ツテ見マシタ、ガ、ヤツバリ駄目デシタ。

雨ガ降ツテ來タ。デ、ハ、多分來ナイダラウ。

といふやうな用例があるが、綴方にはなるべく省略したものは用ゐない方がよいと思ふ。

第六節 助動詞

口語文において、もつとも重要なことは、助動詞の用法であるが、これを組織的に練習することは、今日の小學校に於て、一般に閉却せられて居るやうにおもはれる。もつともこれを組織的に練習すると言つても、中學校や高等女學校における場合とおなじ方法によるべからざることは言ふまでもないので、小學校においては、教師の教案にこれを包

容し。し。か。る。べ。き。順。序。に。よ。つ。て。こ。れ。を。練。習。す。べ。き。で。あ。る。練。習。の。機。會。は。話。方。讀。方。お。よ。び。綴。方。に。於。て。隨。時。こ。れ。を。發。見。す。る。こ。と。が。出。來。る。の。で。あ。る。か。ら。教。師。は。た。く。み。に。そ。の。機。會。を。捕。へ。て。用。法。を。教。授。す。る。や。う。に。心。掛。け。な。け。れ。ば。な。ら。ん。現。在。口。語。に。於。て。普。通。に。用。ら。れ。る。助。動。詞。は。受。身。可。能。使。役。指。定。推。量。希。望。時。敬。語。お。よ。び。打。消。の。九。種。で。あ。る。が。そ。の。用。例。に。つ。き。綴。り。方。に。關。係。の。あ。る。部。分。を。簡。單。に。説。明。し。よ。う。

受身の助動詞 これは鼠ガ猫ニ捕ラレル、盜賊ニ盜マレルのごとく、四段活用の動詞の第一活用形に接続するレルと僕ハ何時モ友人ニ慰メラレル、汽船ニ助ケラレルのごとく、其他の動詞の第一活用形に接続するラレルとをいふのであるが、漢語または國語の名詞に接続する場合には、左の如く、シラレル、ジラレル、セラレル、ゼラレル、サレルの五種の式が成立つ。

何ウシテモマダ目的ヲ達シラレナイ。

君ノ意見デ決セラレル、ハ、ダ。

昨日アノ人ニ嚴シク談ジラレタ。

ウマク乗ゼラレタモノダナ。

乘リ逃ゲサレテ馬鹿ヲ見タ。

可能の助動詞 これはレルとラレルの二種で、その形式上の用法は受身の助動詞と同一であるが、ただし、四段活用の動詞に接続する場合、書カレル、押サレル、打タレル、死ナレル、言ハレル、飲マレル、取ラレルを、書ケル、押セル、打テル、死ネル、言ヘル、飲メル、取レルと約めて用ゐることが多い。

私モモット飲マレル。

假名デスト、ウマク書カレマス。

コ、カラナヲ樂ニ見ラレル。

コノ節ハイクラデモ寐ラレル。
子供ノ行末ガ案ジラレル。

使役の助動詞 これは自動車ヲ走ラセル、船ヲ池ニ浮かセルのごとく、四段活用動詞の第一活用形に接続するセルと子供ニ試験ヲ受ケサセル、心配デスカラ、今日ハ止メサセマスのごとく、その他の動詞の第一活用形に接続するサセルとをいふのであるが、佐行變格の動詞は、シサセルと言はないで、普通サセルを用ゐる。すなはち、

若イ者ニハ少シ難儀ヲサセル方ガヨイ。
アレニ案内ヲサセマセウ。

ただし、漢語にはシサセル、ジサセル、サセルが附屬する。

今度ハ大ニ勉強サセマセウ。
彼ニ首尾克ク目的ヲ達シサセテヤリマシタ。
コレヲ判ジサセテ見ヨウ。

イソツブヲ譯サセル。

また使役の助動詞が受身の助動詞に接続すると、使役を受ける意味になる。すなはち、被役の助動詞になるのである。

一時間肩ヲタタカセラレタ。
手紙ヲ澤山書カサレタ。
毎日オ母サンノ御用ヲ務メサセラレル。
此間ハ随分難儀サセラレタ。

指定の助動詞 これは名詞・代名詞・漢語助詞および接尾辭等に接続するダ・デア・ル・デス・デアリマス・デゴザイマスと言ふので、たとへば、

近頃専ラサウイフ噂ダ。
日本ハ世界ノ公園デアル。
ソレモ自分デ求メタ罪デス。
チョット見タバカリデアリマシタカラ、ヨク解リマセンデシタ。
若シ出来ナカッタラ、止メルマデデゴザイマス。

アシタハ暑サウデスネ。

以上の助動詞は助詞の「ノ」を狭んで、動詞・形容詞および助動詞に接続するのが例で、たとへば、

犬カ魚ヲクハヘテ居ルハダ。

自分ハ常ニサウ思フハデアル。

ソレハ全クアノ人ガ悪ルイハダ。

僕ガ確ニ見タノデアル。

今年ハ試験ヲ受ケサセルハデゴザイマス。

この場合に「ノ」を狭まらずして、降ルダ、遠イダ、行クダ、アルデス、悲シイデス、といふのは田舎言葉である。ただし、デセウは「ノ」を狭まなくても接続する。

推量の助動詞 これは名詞および漢語と動詞・形容詞・助動詞の終止形とに接続するダ、ラウと、動詞・形容詞および助動詞の終止形に接続す

るラ、シイを言ふのである。すなはち、

明日ハ多分雨ダ、ラウ。

アノ人ハタシカ大尉ダ、ラウ。

君ハ酒が大分イケルダ、ラウ。

彼ノ人ハ随分苦シイダ、ラウ。

僕ハ残念ダガ、行カレナイダ、ラウ。

明日ハ雪ニナルラ、シイ。

見ルモノハ何モナイラ、シイ。

獨乙語ナラ讀メルラ、シイ。

希望の助動詞 これは動詞の連用形に接続するタイを言ふので、たとへば、

水ガ飲ミタイ。

相撲ヘ行ツテ見タイ。

今年、コソ高等學校ヘ入りタイモノダ。

この助動詞がらゴザイマスに接續するとき、タクがタウに變化する
のが例で、すなはち、

白縮緬一匹買ッテ頂キタウゴザイマス。

私モ御一所ニ御伴致シタウゴザイマス。

昨日ハマコトニ有リガタウゴザイマシタ。

オ芽出タウゴザイマス。

と用ゐられる。またこの助動詞について、一の注意すべきことは、東京語では、いつも芝居が見タイ、水ガ飲ミタイと用ゐるのが習慣で、芝居ヲ見タイ、水ヲ飲ミタイとは言はない。しかし、地方の慣用により芝居ヲ見タイ、水ヲ飲ミタイと用ゐてもよし、あるひはこれを並用してもよろしい。かくのごとき場合に口語として東京語と地方語の關係を知らない、その取扱に迷ふことが少くない。ゆゑにとにかくかゝる形式はいかにこれを取扱ふべきかをあらかじめ研究して、その方針を決定

して置く必要がある。

時の助動詞 時の觀念は大別すると、過去・現在・未來の三範疇になるのであるが、その中現在の時は動詞、助動詞の終止形を以てこれを表彰するのが慣例で、この場合には、別に時の助動詞を用ゐない。すなはち

水ガ流レ、ル。

風ガ烈シク吹ク。

オ母サンニ屹度叱ラレマス。

コレハ使ハセルト宜イ。

花ガ大層咲イテ居ル。

雨ガ降ッテ居リマス。

子供が澤山居ル。

林檎ガ盆ノ上ニアリマス。

科學上の原則あるひは、定理の如きもの、また格言のごときものは、時間

に關係なくして言ひあらはされる。すなはち、以上の場合には、つねに動詞・助動詞の終止形を以て言ひあらはすので、たとへば、

空氣ノ密度ハ高サニ反比例スル。

事物ノ名稱ハ名詞デアリマス。

人間ハ萬物ノ靈長デアル。

長イモノニハ巻カイル。

歴史的現在といふのは、歴史上の出來事を現在の形式を以て言ひあらはすので、たとへば、

義經ノ家來ニ武藏坊辨慶トイフエライ人ガアリマス。

コヽニ白倉源五左衛門トイフ者ガ道場ヲ開イテ、諸士ニ劍術ノ指南ヲ致シテ居リマス。

豊臣秀吉ガ天下ヲ統一シタ頃ノコトデゴザイマス。

といふやうな用例である。

つぎに、過去の時は助動詞テ、タ(デ、ダ)を動詞または他の助動詞に接續してこれを表彰するので、たとへば、

昨日大森へ行ツテ、海水浴ヲシタ。

オ父サマニ叱ラレタ。

ビールヲ飲ンデ、ソレカラ葡萄酒ヲ飲ンダ。

朝顔ハモウ大分咲イテ居マシタ。

一昨日日比谷ニ音楽ガアツタ。

普通文に用ゐられる過去の助動詞は、キ、ケリ、タリ、セリ、タリ、ケリ、タリ、キ、ニケリ、テキ、ニキ等種々あるが、口語文にはテ、タのみであるから、それをたくみに使用しないと、文章が單調に陥り、文勢を弱くする恐があることをつねに注意しなければならん。

つぎに、未來の時は四段活用^の動詞および助動詞マスの第一活用形にウ、その他の動詞とある助動詞の第一活用形にヨウ[、]を結び付けて、これを言ひあらはす。たとへば、

僕モ一所ニ行カウ。

明日ハ屹度書カウ。

入谷ノ朝顔ハモウ咲イテ居リマセウ。

午後ナラゴザイマセウ。

未來の形式は想像または推量の形式と一致する場合が多いので、理屈からいへば、居ラウ・アラウは普通に用ゐられる筈であるのに、おほくは居ルダラウ・アルダラウを用ゐる慣例である。

口語に於ては、普通の時と完了の時との區別が判然しないことが、多いが、しかし、つぎのやうな形式はまづ完了の時と見て宜からう。

御飯ヲ食ベタ。 現在完了。

御飯ヲ食ベテシマツタ。 過去完了。

御飯ヲ食ベテシマツタラウ。 未來完了。

敬語の助動詞　これは待遇關係によつて用ゐられる助動詞をいふ

ので、第一尊敬の意をあらはすのに三種ある。その一は動詞にレル、ラレルを結び付けるもの、その二はナサル、クダサル、アソバス等のごとく、元來は動詞であるが、これを助動詞に轉用して動詞に結び付けるもの、その三はニナルを動詞に結びつけるものである。

右のレル、ラレルは元來可能の助動詞であるが、さらに一轉して敬語の助動詞になつたのである。すなはち、

十日頃横濱へ着カレル。

先生ハヨク生徒ノ世話ヲサレル。

局長ハイツモ早く來ラレル。

つぎにナサル、クダサル、アソバス等の用例を擧げて見ると、

ソノ邊ヲ少シ散歩ナサツテハ何ウデス。

先生ハイツモ朝五時ニオ起キナサル。

チヨットオ待チクダサイ。

今日ノ新聞ヲオ讀ミ、アソ、ハシマシタカ。
少シ待ツテ、イラツシヤイ。

右の例に於て、ナサルに結び付く國語の動詞には、いつも「オ」を冠らせるのが慣用になつてゐるが、しかるに、これを冠らせないで、起キナサル立チナサイ、早クシナサイと用ゐる人がある。これはある地方の方言で、東京語には決して用ゐられない形式である。今日の口語文にはこの形式が大分ひろく用ゐられてゐるが、これはかならず「オ」を冠らせるやうに注意すべきである。ただし漢語の動詞には「オ」を冠らせないで、散歩ナサイ、勉強ナサイといふやうに用ゐるのが普通である。

またオ着ナサル・オ出アソバスといふべき場合に、オ着ニナル・オ出ニナルといふ形式を用ゐることがある。すなはち、

今月ノ末ニオ着ニナリマス。

高橋君ヲオ尋ニナリマスカ。

鎌倉ヘオ出ニナル筈ダ。

書生ヲ急イデオ呼ニナツタ。

しかし、ニナルが敬意を含んで居るのでなく、オ出ニナル、オ着ニナル、オ呼ニナルといふ形式が、尊敬の意を表するものと見る方が穩當であると思ふ。

第二、謙遜の意をあらはす場合には、動詞から一轉したイタス・モウス、モウシアゲル・ツカマル等を助動詞として用ゐる。たとへば、

マタオ伺イタシマセンデ、失禮ツカマツリマシタ。

宅デオ待受ツカマツリマセウ。

ソレデハ御遠慮ナク頂戴イタシマセウ。

オ待タセ申シマシタ。

私ガ御案内申上げマセウ。

尊敬の意を表する場合でも、謙遜の意を表する場合でも、一層丁寧可言ひあらはすときには、いつも、マスを附け加へる。目下の人に對しても、丁寧と言ふ場合には、

オ前今日上野へ行きマスカ。
私ノ履物が出テ居マスカ。

といふやうに用ゐるのが慣例である。

打消の助動詞 これは良行四段活用の外、すべての動詞助動詞の第一活用形に接続するンとナイをいふのである。ただし、左行變格の動詞にこの助動詞が接続するときは、シナイ、センの二つの形式が成立つので、シン、セナイは普通用ゐられない。近來勉強セナイ、旅行セナケレバナラン、といふやうに言ひあらはす人があるが、これは一種の方言で、標準とすることが出来ない。また行クマイ、降ルマイ、來マイなどのマ

イは推量の助動詞であるが、し、かしながら、いつも否定して推量するのであるから、打消の助動詞の一種と見てよろしい。

以上の助動詞は動詞や形容詞とおなじやうに活用するが、なかには推量のダラウ、打消のマイの如く、まつたく活用しないものもある。つぎに活用形を示すと、左の通、

役	使	能			可	身	受		
		飲	見	行カ			助ケ	押サ	
捨テ	取ラ	サセ	セ	メ	ラレ	レ	ラレ	レ	第一活用形
		セ	セ	メ	ラレ	レ	ラレ	レ	第二活用形
		サセル	セル	メル	ラレル	レル	ラレル	レル	第三活用形
		サセル	セル	メル	ラレル	レル	ラレル	レル	第四活用形
		サセレ	セレ	メレ	ラレレ	レレ	ラレレ	レレ	第五活用形

敬		語	
着カ	來	ナサル	クダサル
レ	ラレ	ナサラ	クダサラ
レ	ラレ	ナサツ(テ)	クダサツ(テ)
レル	ラレル	ナサル	クダサル
レル	ラレル	ナサル	クダサル
レル	ラレル	ナサル	クダサレ
マセ	マセ	マス	マスレ

注意 第一活用形を將然一形、第二活用形を連用形、第三活用形を終止形、第四活用形を連體形、第五活用形を已然形ともいふ。

希	望	打	消	推量
行キ	見	取ラ	任セ	行ク
タク	タク	タク	タク	ラシク
タイ	タイ	ナイ	ナイ	ラシイ
タイ	タイ	ナイ	ナイ	ラシイ
タクレ	タクレ	ナケレ	ナケレ	〇
第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	

注意 第一活用形を副詞形、第二活用形を連體形、第三活用形を終止形、第四活用形を已然形ともいふ。

指定の助動詞はつぎの通に活用する。

第一活用形	第二活用形	第三活用形
デ	ダ	ダラウ
ノデ	ノダ	ノダラウ
デシテ	デス	デセウ
ノデシテ	ノデス	ノデセウ
デアリマシテ	デアリマス	デアリマセウ
ノデアリマシテ	ノデアリマス	ノデアリマセウ
デゴザイマシテ	デゴザイマス	デゴザイマセウ
ノデゴザイマシテ	ノテゴザイマス	ノデゴザイマセウ
デ	ダツタ	ダツタラウ

ノデ	ノダツタ	ノダツタラウ
デシテ	デシタ	デシタラウ
ノデシテ	ノデシタ	ノデシタラウ
デアリマシテ	デアリマシタ	デアリマシタラウ
ノデアリマシテ	ノデアリマシタ	ノデアリマシタラウ
デゴザイマシテ	デゴザイマシタ	デゴザイマシタラウ
ノデゴザイマシテ	ノデゴザイマシタ	ノデゴザイマシタラウ

注意 第一活用形を中止形、第二活用形を終止形、第三活用形を推量形ともいふ。

過去の助動詞は次ぎの通に活用する。

第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
テ	タ	タ	タラウ
デ	ダ	ダ	ダラウ

注意 第一活用形を中止形、第二活用形を終止形、第三活用形を連體形、第四活用形を

推量形ともいふ。

綴り方においては、助動詞と助詞がもつとも重要な關係を有するもので、基礎練習に於て、十分これを會得させるやうにしないと、思想表彰の形式が、しばしばあやまられる。助動詞の中でも、使役敬語および時に關するものは、兒童に取つてもつとも困難なものである。たとへば、芝居ヲ見セルと、芝居ヲ見サセルの區別が、しばしばあやまられる。小使ガ石炭ヲクベルといふ形式が既習のものとして、先生ガ小使ニ石炭ヲクベサセルといふ意味を言ひあらはさせようとする、兒童が先生ガ小使ニ石炭ヲクベルといふやうな誤をする兒童がしばしばある。使役や被役の形式は大人でもたびく誤るものであるから、いはんや小學兒童に取つてはなかく六かしいのである。また敬語の助動詞はさきに代名詞のところ述べて通きはめて複雑なものであるから、

教師は待遇關係を明にして、その用法を練習するやうに心掛けなければならぬ。ことに助動詞は地方によつていろいろの種類があり、その用法も區々であるから、その關係上、東京語における慣用を確實に學ばせることは、一層の難事である。日用文などは、かならず相手に明にして書き綴らせるやうにすれば、自然待遇の差によつて、用法の異なるところが會得されるのである。話方の練習に於て、甲乙丙丁の身分を豫定して、たがひに對話させるやうにするのも、有力な効果があらうと思ふ。時の助動詞も、兒童に明瞭な時間觀念を與へて、しかる後、その用法を練習させれば、誤謬を減少するとはかならずしも難事でない。要するに、話方や綴方に於て、一定の方案の下に、助動詞を練習することがもつとも必要である。

第七節 助詞

今日の口語に於て、いはゆる助詞と稱せられて居るものは、人々によつて多少異なるのであるが、その主要なるものを擧げて見ると、

ガ ノガ ノ ニ ノニ ヲ ノヲ ト ヘ ヨリ カラ マデ
 デ ノデ モ ノモ ニモ サヘモ カラモ ヨリモ ヘモ コ
 ソ サヘ ノミ バカリ ダケ キリ(ギリ) ホド ホカ シカ
 クラキ(グラキ) ドコロ(ドコ) ハ ノハ ヘハ トハ カラハ ヨ
 リハ マデハ バ テ テモ デモ モノ、 ナラ ノナラ モ
 ノナラ シテ トモ ナリ タリ(ダリ) シ ヤ ヤラ ノヤラ
 ダノ カ ノカ モノカ ナ ナガラ ツ、

以上の順序によつてその用例を擧げて見よう。

(一) が

一 主格に用ゐられるもの

風ガ吹ク。

遠クガ見エル。

行ツテ見ルガ宜イ。

コレバカリガ、アノ人ノ短所ダ。

二 「ラ」の意味に用ゐられるもの。

氷水ガ飲ミタイ。

オ前ドレガ欲シイノデスヨ。

芝居ガ見タイ。

馬ニ鹽俵ガツケテアリマシタ。

三 二つの語句を結びつけるもの

京都へ行キマスガ、何カ御用ガアリマセンカ。

コレモ宜イガ、アレモ宜イ。

随分勉強シタガ、入學ガ出来ナカッタ。

天氣ガ宜イガ、風ガ寒イ。

兄弟ハ多イガ、皆女バカリダ。

折角御出ヲ願ヒマシタガ、何ノ風情モゴザイマセン。

四 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

アラウガ、アルマイガ、構ハナイ。

行カウガ、行クマイガ、コチラノ勝手ダ。

五 慣用の語として用ゐられるもの、

十年ガ百年カ、ツテモ、目的ヲ達シナケレバナラン。

今ガ今マデ知ラナカッタ。

(二) のが

一 代名詞に附屬するもの、

僕ハガコレダ。

君ハガアレデスカ。

二 用言に附屬するもの、

帆掛船ノ來ルノガ見エル。

私ノ目ノ見エンノガ悲シウゴザイマス。

長イ、ガ宜イデヤナイカ。
行キタイノ、ガ山々デスガ、今日ハヤメマセウ。

この助詞は「モノ」「コト」といふやうな體言の代りに用ゐられるものである。

(三) の

- 一 語句を結び付けるもの、
木ノ葉 松ノ枝 田舎ノ人 東京ノ日比谷公園
源ノ頼朝 平ノ清盛
- 二 體言を略してその代りに用ゐられるもの、
種々雜多ノ原因 水入ラズノ仲 何ヨリノ物
アレハ君ノダラウ。
英吉利ノヨリハ上等ダ。

ノガ、ノヲ、ノニ、ノモ等もこれと同じやうに用ゐられる。

- 三 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

何ノ彼ノト言ツテ困ル。

善イノ惡イノト言ツテモ駄目ダ。

- 四 疑問または感歎の意味に用ゐられるもの、

オ母サン、今御出ニナリマシタハ。

ソナナコト私ハ知ラナイノ。

(四) に

- 一 種々の語句に附屬して副詞に用ゐられるもの、

机ニ本ガ載ツテ居ル。

森ノ上、二月ガ出マシタ。

イツモ夜中ニ眼ガサメル。

朝五時ニ起キマス。

面白サウニ聞イテ居ル。

- 二 動作または状態の標準を示すもの、

財産ヲ子ニ譲ル。

手紙ヲ友人ニ送ル。

屬官ニ書カセル。

先生ニ叱ラレタ。

湯ガ水ニナル。

三 ナドニの意味を有するもの、

アノ人ニソソナ事ガ出來ルモノカ。

女ノ子ニソソナコトハサセラレナイ。

オマヘニ出來ルモノカ。

四 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

女ガ五人ニ子供ガ三人來マス。

笛ニ太鼓ニ鼓ガハイリマス。

字紙鴛ニ繪紙鴛。

五 慣用の語句として用ゐられるもの、

月ニ叢雲 花ニ風 猫ニマタタビ泣ク子ニオ乳

梅ニ鶯 竹ニ雀。

(五) のは

一 「モノ」コトといふやうな體言を略して、その代りに用ゐられるもの、

遊ブノニ骨ガ折レル。

住ムハニ便利ダ。

長イハニ限ル。

二 原因または條件をあらはすもの、

物ヲ買フノニ不便ダ。

試験ヲ受ケルノニ都合ガワルイ。

イツモ長イハニ困ル。

ヤカマシイハニ閉口シタ。

三 「ト」の意味で語句を結びつけるもの、

ツクム、思フハニ何ウモ面白クナイ。

アノ人ノ來ルノヲ見ルハニ何時モ遅イ。

四 「ニモ拘ラズ」の意味で語句を結びつけるもの、

モウ日ガ暮レルハニ、マダ來ナイ。

雨ガ降ルハニ、傘ヲ持ッテキナイ。

今聞イタノ、ニ、モウ忘レタノカ。

五 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

長イノ、ニ、短イノ、ニ、太イノ、ニ、細イノ、ニ、種々アル。

白イノ、ニ、赤イノ、ニ、青イノ、ニ、黄ロイノヲ下サイ。

六 語句を省略して余情を含ませるもの、

アレホドニ言ツタノ、ニ。

宅ニモ澤山アリマシタノ、ニ。

(六) を の を

一 動作の目的はまた標準を示すもの、

西洋館ヲ、表ニ造ル。

鳥ガ空ヲ、飛ブ。

人ガ橋ヲ、渡ル。

二 體言ニ附屬するもの、

誰カノ、ヲ、間違ツテ來タ。

君ノ、ヲ、借リテ來タ。

他人ノヲ間違ツテ來タ。

三 用言に附屬するもの、

朝カラ君ノ來ルノ、ヲ、待ツテ居タ。

今死ヌノ、ヲ、残念ニ思ツテ居ル。

熱イノ、ヲ、知ラズニ食ベタ。

(七) と

一 動作の標準を示すもの、

子供ノ名ヲ太郎トツケル。

僕ノ講義ハ近松トキメタ。

二 語句を結びつけるもの、

汽車カラ降リルト、雨ガ降ツテ來タ。

寒クナルト、身體ガ悪クナル。

ソシテハ決シテナイト思フ。

三 「ト共ニ」の意味で用ゐられるもの、

今晚弟ト散歩スル約束ダ。

英國ト同盟ヲ結ンダ。
昨日ハ一日子供ト遊ンダ。

四 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、
士官ト兵卒ト一所ニ食事シテ居ル。
茄子ト南瓜ト西瓜ト黄瓜ガ並ンデ居ル。
行クト歸ルトドチラガ早イ。

五 比較する場合に用ゐられるもの、
京都トドチラガ早イカ。
アンナ人ト違ヒマスヨ。

六 條件を示すもの
泣クトオ母サンニ叱ラレル。
雨が降ルト行カナイ。
重イト困ル。

七 種々の語に附屬して副詞に用ゐられるもの、
今晚ハユックリト寝ル。

コノ小供ハマル、
僕ハ斷然ト決心シタ。

(八) へ

一 動作の標準を示すもの、
コレカラ東京ヘ行ク。
歐羅巴ヘ巡回ヲ命ゼラレタ。
棚ヘ入レテオク。
高等學校ヘ入學スル積ダ。
弟ヘヤツテシマッタ。

文語では「へ」は方向、「ニ」は場所を示すものとして區別して用ゐられる傾があるが、口語ではその區別がまつたく消滅して兩方おなじやうに用ゐられる。

(九) より よりは よりも

一 比較の意味で用ゐられるもの、

父母ノ恩ハ海ヨリ深イ。
 行クヨリ寝ル方ガ宜イ。
 貰フヨリハ買フ方ガ得ダ。
 夏ハ海ヨリモ山ガ健康ニ適スル。
 櫻ヨリモ梅ノ方ガ面白イ。

(十) から からも

一 動作の起點または場所を示すもの、
 東京カラ送ツテ來タノダ。
 懐カラ手ヲ出シテ居ル。
 僕ノ學校ハ朝七時カラ始マル。
 朝起キテカラ少シモ隙ガナイ。
 コレハ九州カラモ出ルダラウ。
 コ、カラ行クト、一番近イ。
 戰爭前カラ見ルト、物價ノ騰貴ハエライモノダ。
 二 原因を示すもの、

ソシテトコロヘ行クカラ悪ルイ。
 マダ讀マナイカラ知ラナイ。
 ソシテ馬鹿ナコトヲスルカラ笑ラハレルノダ。

(十一) から から||まで

一 事物や動物の範圍を示すもの、
 今日マデ持ツテ居タノニマダ來ナイ。
 逆境ニ立ツト、親類マデ近寄ラナイ。
 來月ノ中旬マデ猶豫スル。

二 「カラ」マデと相對して用ゐるもの、
 初カラ終マデ讀ンデ居ル。
 十八才カラ二十才マデ取ル。
 青森カラ長崎マデ汽車で行ケル。
 起キルカラ寝ルマデ働イテ居ル。

(十二) て のて

一 場所をあらはす體言に附屬するもの、
 コノ本ハ神田、デ買ッテ來タ。
 門司、デ汽船ニ乗ル積ダ。
 昨日、チヨット途中、デアヒマシタ。

二 事物をあらはす體言に附屬するもの、
 コノ畫ハ鉛筆、デ書イタノダ。
 小刀、デ手ヲ切ッタ。
 自轉車、デ玉川へ遊ビニ行キマシタ。
 人ノ力、デ成リ上ッタモノダ。

三 時間に關する體言ニ附屬するもの、
 コレハ一週間、デ大抵出來上リマス。
 三ヶ年、デ大抵切リ上ゲル積ダ。
 飯ガ濟ムト、其後、デ話ヲスル。

四 その他の體言あるひは類性のものに附屬するもの、
 コノ間カラ人ノ事、デ奔走シテ居ル。

アノ人ハ大層相場、デ損ヲシタ。
 食フヤ食ハズ、デ奔走シタ。

五 語句を結びつけるもの、

コレモ優等、デアレモ優等ダ。
 アノ人モ肺病、デ、父モ肺病ダ。

六 原因を示すもの、

コノ節ハ暑イノ、デ、何モ出來ナイ。
 雨ガ非常ニ降ッテ來タノ、デ、目ガサメタ。
 ヨク分ラナイノ、デ、早く歸ッテ來タ。

(十三) も

一 分量を示すもの、

京都ニ行クニハ十圓、モアレバヨロシイ。
 一年モ、經タナイ内ニヤメタ。
 私ナドハ一日モ、務マリマセン。

二 程度または範圍を示すもの、

ロク／＼讀メ、モシナイ。

サスガノ豪傑、モ弱ツタカナ。

御飯一粒、モ残サナイデ食ベタ。

飛鳥、モ落ス勢デス。

モウ藥、モ通ラナクナリマシタ。

行キ、モシナイデ分ルモノカ。

三 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

京都、モ大阪、モヨク知ツテ居ル。

櫻、モ桃、モ一所ニ咲キマス。

東カラ、モ西カラ、モ來マス。

嬉シク、モ悲シク、モナイ。

神田ニ、モ本郷ニ、モアル。

四 慣用の語句として用ゐられるもの、

君、モ君、ダシ僕、モ僕、ダ。

ソナナコトサセル奴、モサセル奴、ダ。

(十四) のも にも さへも からも へも よりも

一 體言に附屬して「コト」「モノ」の意味を含むもの、

大阪ノ、モ成功シタヤウダ。

僕ノ、モ駄目ラシイ。

長崎ノ、モ未定デス。

二 用言に附屬して「コト」「モノ」の意味を含むもの、

カウシテ行カレルノ、モ、全クアナタノ御蔭デス。

櫻ノ咲クノ、モ、コレカラデス。

君ノ來タノ、モ、知ラズニ居タ。

三 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

行クハ、モ行カナイハ、モ、君ノ勝手ダラウ。

長イハ、モ短イハ、モアリマス。

雪ノ降ルハ、モ雨ノ降ルハ、モ、厭ハズニ働キマシタ。

四 あるものを綜合する意味を含むもの、

君ニ、モ何時カ話シタ筈ダ。

アノ方デサ、ヘモヨク出来マセン。
 京都カラモ送ツテ來タ。
 何處ヘモ參リマセンデ、宅ヘ引込ンデ居リマス。
 ラムネヨリモ麥湯ノ方が宜シイ。
 イカサマガシテアルカモ知レマセン。

(十五)こそ

語句の意味を強め、あるひは多くのものゝ中から特に選擇する意味に用ゐられるもの。

今日、コソ本望ヲ達シナケレバナラン。
 イヤソレ、コソ大變ダ。
 見テ、コソ分ルガ、只聞イタ丈デハ駄目ダ。
 仲ノヨイ、コソ、何ヨリ仕合セダ。
 ソレヲ思ヘバ、コソ、ヤカマシク言フノダ
 ソレデ、コソ、男ノ一分ガ立ツツケダ。

(十六)さへ

軽いものを舉げて重いものを言外にさとらせ、あるひは、ある事柄をあげてその上に重いものを添へる心持で用ゐられるもの。

腕サ、ヘアレバ樂ニ通レル。
 水サ、ヘ咽喉ニ通ラナイ。
 只行キサ、ヘスレバ宜シイ。
 親類カラサ、ヘ見離サレタノダ。
 静ニサ、ヘシテ居ルトスグ癒リマス。
 那翁デサ、ヘ困ツタノダ。
 君デサ、ヘモ出来ナイデヤナイカ。

(十七)のみ

「ダケ」の意味で用ゐられるもの。
 心カラ心配シテ居ルノハ、私ノミデス。
 チョット行ツテ見タノミダ。

(十八)ばかり ばつかり のばかり

一 事物分量程度を限定する意味で用ゐられるもの、
 毎日、雨ばかり降って困ります。
 ソレ、バツ、カリ、ガ、心、配、デ、ス。
 苦しい、ばかりで、何の得るところもない。
 只綺麗、な、ばかりで、品、が、ワ、ル、イ。
 芝居へ行く、の、ばかり、樂、し、ん、で、居、ル。

二 分量を示すもの、

この仕事ヲ始メルノニ、千圓、ばかり、カ、ハ、ル。
 學生ガ凡ソ五百人、ばかり、アル。
 横濱マデ八里、ばかり、アリ、マ、ス。

(十九) だけ

一 分量あるひは程度を示すもの、
 五百人、だけ、入學ヲ許シタ。
 家ノ高サ、だけ、雪ガ積ツタ。
 食フ、だけ、働ケ、バ、結構、デ、ス。

近ケレバ、近イ、だけ、都合ガ宜イ。

二 事物分量程度を限定する意味で用ゐられるもの、

私、だけ、行キマ、ス。
 家族ニ、だけ、知ラセテヤリマ、ス。
 見ル、だけ、デ、止、メ、テ、オキマ、ス。
 唯座ツテ居ル、だけ、何モ役ニ立チマ、セン。

三 條件と結果と相當する意味をあらはすもの、

身分ガ宜イ、だけ、流石ニ品ガアル。
 腕ガアル、だけ、ニ落付イテ居ル。
 仕事ガ忙シイ、だけ、利益ガ多イ。

(二十) きり(ぎり)

事物分量程度を限定する意味を有するもの、

今日、ギリ、デ、モウ、參リマ、セン。
 昨日、家ヲ出タ、キリ、マ、ダ、歸ラナイ。
 君ガ來ル、キリ、デ、誰モ來ナイ。

モウ百圓ギリダ。

普通この場合にダケが用ゐられ、キリはだんく減少して居る。

(二十一) ほど

分量または程度を表示するもの、

コンナ品ハ山ホドアル。

静岡マデ六時間ホドカ、ル。

大學ニハ學生ガ二千人ホド居リマス。

泣クホド、苦シイコトガナイ。

讀メバヨムホド面白イ。

ナガク置クホド味ガヨクナル。

(二十二) ほか しか

あるものを除いてその他のものを打消す意味をあらはすもの

僕ホカ行キマセン。

酒ハ麥酒ホカ飲マナイ。

泣クヨリホカ仕方ガナイ。

昨日ハオ母サンシカ行キマセン。

コ、ニハ長イノシカアリマセン。

(二十三) くらゐ(ぐらゐ)

分量または程度を表示するもの、

馬グラキ可愛イモノガナイ。

私グラキ苦勞シタモノガ外ニアルマイ。

十年グラキ辛棒スレバ、獨立ガ出來ル。

ドノクラキアレバ間ニ合ヒマスカ。

少々痛イクラキ我慢スルサ。

(二十四) どころ(どこ)

分量や程度の豫想外であるか、特に注意を要する場合に用ゐられるもの。

芝居ドロコノ騒ギデナイ。

中學ドロコカ小學モ卒業シナイ。

百圓ド、コロカ千圓モカ、リマセウ。
 ソンナ呑氣ナ話ド、コロデアリマセン。
 苦シイド、コノ話デナイ。
 コ、ガホントノ聞キド、コデス。

(二十五) は

- 一 體言に附屬するもの、
 風ハ吹クガ、雨ガ降ラナイノハ仕合ダ。
 夏ハ涼シイガ、然シ蚊ガ居ル。
 私ハ中學ノ三年生デス。
- 二 副詞に附屬してその意味を強めるもの、
 マダ遅クハアルマイ。
 善クハ知ラナイ。
 明日マデハ待ツテモヨロシイ。

この助詞は特に意味を強めて言ふ場合に用ゐられ「が」よりは意味がは

るかに重い。主格をあらはす「が」の代りに「は」を用ゐる用例には地方的慣用があるから注意を要する。

(二十六) のはへはとはからはよりは

- 一 用言に附屬して「コトハ」「モノハ」の代りに用ゐられるもの、
 聞クハ、ハ今始メテデス。
 今ハジメルノ、ハ少シ遅イダラウ
 長イノ、ハ閉口ダ。
- 二 體言に附屬して「コトハ」「モノハ」の代りに用ゐられるもの、
 君ノ、ハマダ來ナイカ。
 大阪ノ、ハウマク行クカシラ。
 イツカ御話ノ、ハ何ウナリマシタ。
- 三 種々の助詞と結合して用ゐられるが、しかし、いつも強める意味がある。
 東京へ、ハ行クガ、横濱ハ止メヨウ。
 八百屋カラ買ツタノト、ハマルデ違フ。

神戸、カラ、ハ別ニ通知ガ來ナイ。
京都、ヨリ、ハ、大阪ガ遙ニ活氣ガアル。

(二十七) ば

一 假定または條件の意味をあらはすもの。

ヨク讀メバ、分ルダラウ。

朝早く起キレバ、心持ガヨイ。

長ケレバ、少シ切ツタラ何ウダ。

二 語句を結びつけるもの。

酒モアレバ、肴モアル。

獨乙語モ出來レバ、英語モウマイ。

僕モ行カナケレバ、先カラモ來ナイ。

(二十八) て(て)

一 語句を結びつけるもの。

淺草へ行ツテ、ソレカラ向島へマハツタ。

日ガ暮レテ、途ガ遠イ。

體ガ細クテ、中ガ空デス。

人ニ頼ンデ買ツテ貰ツタ。

二 用言に結びつけて副詞に用ゐられるもの。

泣イテ、親ヲ諫メマシタ。

追テ、コチラカラ申上ゲマス。

少シ細クテ困ル。

(二十九) ても(ても)

一 假定の意味をあらはすもの。

少シ位飲ンデ、モ害ハアルマイ。

イツ行ツテ、モ留守ノヤウダ。

イクラ高くテ、モ買ヒマス。

二 既定の意味をあらはすもの。

昨日ハイクラ呼ンデ、モ、不通ダツタ。

雨ガ降ツテ、モ、別ニ道ガワルクナカッタ。

留守ニナツテモ、變リガナイヤウダ。

三 條件をあらはす語句を重ねるもの、

雨が降ツテモ、雪が降ツテモ、出掛ケマス。

大根ハ煮テモ、漬ケテモ、食ベラレマス。

長クテモ、短クテモ、構ヒマセン。

また「トイツテモ」の場合にタツテダツテといふことがある。

幾ラ金ガアルタツテアマリヒドイ。

苦シクタツテ構フモノカ。

女ダツテ馬鹿ニ出来ナイ。

日曜ダツテアルダラウ。

(三十) ても

一 漠然とあらはすもの、

天氣ハ穩デモ、油斷ハ出来ナイ。

那翁デモ、コレハ出来マイ。

コンナモノデモ、御間ニ合ヒマスカ。
イクラ女デモ、ソレデハ承知シマイ。
タトヒ小兒デモ、捨テ、置カレナイ。

二 漠然とある標準をあらはすもの、

セメテ君デモ、來テ呉レタラヨカッタ。

ドウゾ湯デモ、一杯頂キタイモノデス。

棚ノ上ニデモ、置イテ呉レ。

ソノ位デモ、アレバ助カリマス。

場合ニヨツテハ、行カナイモノデ、モナイ。

三 語句を重ねる場合に用ひられるもの、

十錢デモ、二十錢デモ、宜シウゴザイマス。

水デモ、湯デモ、少シ下サイ。

兄サンデモ、姉サンデモ、構マセン。

(三十一) もの

相調和しない事柄を結びつけるもの、

風ハ吹クモノ、妙ニ暑イ。
 學問ハアルモノ、アマリ働カナイ人ダ。
 見タトコロハ好イモノ、決シテ丈夫デナイ。

(三十二) なら のなら ものなら

條件の意味をあらはすもの

煉瓦造ナラ大丈夫ダラウ。
 酒ナラ眞平御免ダ。
 行クナラ早く來イ。
 來ルハナラ來ルデヨロシイ。
 ソンナニ飲ムモノナラ、苦シクテ堪ラナクナリマス。

この助詞は文語のナラバ・ナレバの變つたもので、既定のこともあり、既定の事もあるが、その區別は前後の關係によつて判断しなければならん。

(三十三) して ばして

もとの意味が薄くなりいろくの語に結びつけてかるく用ゐられる。

何モナカツタカシテ、直グ歸ツテ來タ。
 ソレカラシテ、大阪へ行キマシタ。
 何ウカカウカシテ、助ケマシタ。
 君ニシテハ千慮ノ一失ダ。
 ドチラニシテモ損ハナイ。

(三十四) とも と

一 假定の意味をあらはすもの、

何ウナラウトモ、僕ハ構ハナイ。
 タトヒ殺サレヨウトモ、一步モ退カン。
 私ハ行カズトモ、宜シウゴザイマス。
 金ハナクトモ、學問ガアレバヨロシイ。

二 他の語に附屬して副詞を形作るもの、

遅クトモ十日ニハ來ル筈ダ。
 一日ナリトモ、長ク活カシテ置キタイ。

三 「トモ」のモを省いて用ゐるもの、
行カウト、行クマイト、僕ノ勝手ダ。

何ナリト、御遠慮ナク仰シヤツテ下サイ。

四 特に意を強めて應答するもの、

面白イモノガアルカ。アルトモ。

オ前一人デ行ケルカ。行ケルトモ。

ソレデ宜イカ。宜イトモ。

(三十五) なり なりと

一 漠然とある標準を示すもの、

湯ナリ、粥ナリス、ツテ居ル。

麥酒ナリ、葡萄酒ナリ、御好次第ダ。

大阪ヘナリト、神戸ヘナリト、御都合次第デ御届下サイ、

二 他の語に附屬して副詞を形作るもの、

何ナリト取ツテ置ケ。

行キナリ、飛ビ込ンダ。

寝タナリ、動カレナイ。

(三十六) なり

語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

光ツタリ、消エタリ、大層見事ダ。

見タリ、聞イタリ、シテ非常ニ面白カッタ。

飛ンダリ、ハネタリ、大騒シテ居ル。

(三十七) し

一 語句を重ねる場合に用ゐられるもの

朝ハ早イシ、夜ハ遅イシ、少シモ隙ガナイ。

本ハヨメナイシ、字ハ書ケナイシ、全ク駄目ダ。

雨モ降ルシ、風モ吹クシ、今日ハ止メヨウ。

二 語句を結びつけるもの、

酒モ飲マナイシ、烟草モ嫌ダ。

随分苦シイコトモ御座イマスシ、樂デハアリマセン。

君デヤアルマイシ、ソナコトスルモノカ。

(三十八) や の や

一 事物を並列する場合に用ゐられるもの、

鯛、ヤ鰈、ヤ種々ナ魚ガ居ル。

呉服屋、ヤ米屋ナドガ並ンデ居マス。

食フヤ食ハズニ働イテ居ル。

長イノ、ヤ短イノ、ヤイロくアリマス。

二 人呼びかけるときに用ゐられるもの、

坊ヤ、ハヤク御出デ。

花ヤ、チヨット行ツテオ呉レ。

(三十九) やら の やら

一 語句を並列する場合に用ゐられるもの、

踊ルヤ、ラ歌フヤ、ラデ大騒ダツタ。

打ツヤ、ラ厥ルヤ、ラ随分ヒドイ亂暴ヲシタ。

嬉シイヤ、ラ悲シイヤ、ラ、少シモ譯ガ分リマセン。

二 推量または不定の意をあらはすもの、

何ウヤ、ラ晴レサウダ。

何が何ヤ、ラチットモ譯ガ分リマセン。

手紙ガ届カナイノヤ、ラ、一向返事ガ來マセン。

何時來タノヤ、ラ、少シモ覺エガナイ。

(四十) だの

事物を並列する場合に用ゐられるもの、

筆ダ、ノ墨ダ、ノ紙ダ、ノイロく、貫ヒマシタ。

ヤレ芝居ダ、ノヤレ相撲ダ、ノトイツテ贅澤ナコトダ。

(四十一) か

一 疑問の意をあらはすもの、

明日ハ天氣ニナルダラウカ。

デナタハ何時御歸ニナリマスカ。

ソコニ居ルノハ兄サンカ。

二 不定または疑念の意をあらはすもの、
幾分カ心持ガ宜イヤウダ。

何ダカ空模様ガ怪シクナツテ來タ。
三日カ、四日デ來ルダラウ。

三 反語に用ゐられるもの、
コノ計畫ヲ始メタノハ、一體君ヂヤナイカ。

ソレデ及第ガ出來ルト思フカ。
ソナナ馬鹿ナコトガアルダラウカ。

四 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、
行クカ、行カナイカ、聞イテ見ロ。

何ウカ、カウカ、切り抜ケタ。
長イカ、短イカ、調べテゴラン。

(四十二) のか ものか とか

一 疑問の意をあらはすもの、

君イツ來タノカ。

今日學校へ行カナイノカ。

ソナニ嬉シイノカ。

二 不定または疑念の意をあらはすもの、

何ウナルノカ、甚ダ心細イ譯ダ。

イツ來タノカ、少シモ知ラナカツタ。

三 反語に用ゐられるもの、

ソナナコトデウマク行クモノカ。

君ナドニ出來ルモノカ。

芝居ナドニ行クモノデスカ。

四 語句を重ねる場合に用ゐられるもの、

行クノカ、行カナイノカ、チツトモ分リマセン。

重イノカ、輕イノカ、早クキメテ呉レ。

甘イトカ、カライトカ、言ツテヤレ。

(四十三) な

禁止の意をあらはすもの、

決シテ馬鹿ナコトヲスルナ。

アノ人ト交際スルナ。

何處ヘモ行クナ。

(四十四) ながら

一 種々の語に附屬して副詞に用ゐられるもの、

何時モナガラ御元氣デ結構ダ。

憚リナガラ御安心下サイ。

生レナガラノ白痴ナラ仕方ガナイ。

二 用言に附屬して動作の繼續を示すもの、

食ベナガラ行クノハ可笑シイ。

飲ミナガラ話シマセウ。

随分苦情ヲ言ヒナガラ働イテ居ル。

ソナコトハ百モ知リナガラ改メナイ。

遊ビナガラ行ツテ見ヨウ。

(四十五) つつ

動作の繼續を示すもの、

知リツ、知ラナイ振ヲシテ居ル。

心ニ思ヒツ、御無沙汰致シマシタ。

以上は主要なる助詞の用例を挙げたのであるが、なほこの外に此人

ナドモ來ル。芝居ナンゾ見タクナイ。御詫カタガタ參上致シマシタ。

受取ツタマ、マダ見ナイ。何時頃來ルカシラ。芝居ニシロ、相撲ニシ

ロ、理屈ハ同ジコトダ。昨日行ツタケレドモ駄目ダツタ。タダノ一日

ダツテ休ンダコトガナイといふやうな形式もある。これまで列舉し

た用例は、地方によつて少からざる相違があるであらうが、とにかく標

準語によつて教育する場合には、これを深く研究し、これを組織的に練

習して、話方や綴方乃至は讀方の基礎を固定するのが、もつとも必要な

事柄である。ゆゑに綴方の基礎練習を行ふ場合にはまづかくのごとき形式が、國語讀本にいかん提出せられて居るかを調査し、これを學年の程度に鑒みて一定の方案の下に練習するのが、もつとも緊要なことであるが、これまでかゝる練習が一般に閑却せられてゐたので、綴方の成績がはなはだ振はないのである。

第八節 餘論

以上は各品詞について心得て置くべき重要な事柄を略述したのであるが、些末な事實は一切省略した。なかには文語法と相比較して説明する方が便利であると認めて、その方にしばらく譲つたものもあるが、とにかく話方や綴方の練習上にあまり密接な関係のないものは一切省略したのである。おなじく品詞にしても、副詞や感動詞のごとき、

あるひは數詞のごとき、別に文法上から特に説明を要する必要のないものは、これを省略したが、一體かゝる品詞に屬する語彙の用例は、讀方やその他の場合において練習すべきもので、特に文法上からこれを學習するほどのものでないと思ふ。東京語に屬する種々の副詞は、文法によつて學ぶべきものでなく、むしろ東京語で書きあらはした小説や講談や、その他種々の文學を材料として、その意味や用例を知る方が捷徑である。感動詞や數詞にしてもやはりその通である。これらの品詞には地方によりて種々の形式や慣用が存在するから、その方言的なものはなるべく避けて、標準的なものを正確に自由に使用し得るやうに心掛なければならぬ。ことに副詞には随分地方的なものが多いので、いづれが標準語に屬するものであるかを明にして置かなければ、話方や綴方の練習上に種々の困難を感じるわけであるが、しかしその種

類や用例は文法上から學習すべきものでなくして、むしろ文學の上から會得すべきものと信ずる。その他語の構成上接頭辭や接尾辭について知らなければならぬこともあるが、しかしながら特に文法上から學ぶべき必要のあるものは、あまり多くない。

第三章 文語法と口語法の關係

第一節 緒論

文語法は千有餘年來の歴史を有する文章の法則を組立てたもので、現在われわれが日常の談話に使用するものに比すると、少からざる相違を有する。元來口語法はわれわれが日常の談話に使用する言語の法則を組立てたものであるが、これに反して文語法は日常の談話から幾分の影響を受けるものゝ、大體は獨立に發達して居るのである。ゆゑに文語法と口語法の關係をよく攻究して置くことは、小中學の實際家にとつても緊要なことである。小中學における讀方教授を見るに、普通文の教材は大抵これを口譯させて居る。すなはちいはゆる講義をさせて居るが、その講義なるものはほとんどその體をなして

ゐない。かくのごとき缺陷はなに、原由するかといふと、つまり文語法と口語法の關係を熟知しないためである。動詞や助動詞にしても、はた助詞にしても、口語と文語との間に少からざる相違があるのであるが、それを一通心得て置かないと、正確に自由に普通文を口譯するところが出来ないのである。今日の小中學における讀本教材の講義を見るに、おほくは文語と口語とを混和してはなはだ不體裁なものである。かゝる講義によつて、教材の眞意を了解することが困難であるのみならず、言語の健全な發達を妨げることが少なくないと思ふ。ゆゑに教授者はあらかじめ文語法と口語法の關係を闡明して、口譯を行はしめる際、つねに甚深の注意を加へなければならぬ。もし兒童や生徒にして口譯の方法その宜しきを得ない場合には、嚴重に訂正してその關係をよく會得させなければならぬが、小中學の實際家にこの點の注意が

はなはだしく缺けて居るやうに見える。これが讀方教授の實績に不徹底な憾がある所以の一である。

つぎに口語法それ自身について見ても、普通の談話における場合の法則と、文章に書き綴る場合の法則と幾分の相違がある。口語文として書き綴るものは、普通文の體姿によほど近づいて居る。つまり現在われわれのいはゆる口語文と稱へて居るものは、日常の談話をそのまま書き綴つたものでなくして、幾分人爲的に洗煉修琢を加へてあるのである。ある場合には普通文の要素を多少加味することも止を得ない。御出席アラムコトヲ希望シマス、といふ形式は口語文に用ゐても差支ないので、これをしひて御出席アルヤウニ希望致シマスと言ひあらはさなければならぬことではない。普通の談話では、背モ高イシ、色モ白イ。酒モ飲ムシ、菓子モ食フ、といふやうに言ひあらはすのであるが、

しかし口語文では普通文の格式に従ひ、脊モ高ク、色モ白イ。酒ヲ飲ミ、菓子ヲ食フといふ形式を用ゐて差支ないし、また實際これを用ゐて居るのである。脊モ高ク、色モ白イ。酒モ飲ミ、菓子ヲ食フといふ言ひあらはし方は、日常における實際の談話には用ゐられないが、口語文としてはすこしも差支ない。これらのことも話方や綴方等において心得て置くべき必要な事柄である。

第二節 動詞

動詞について口語と文語の間における主要な差異を見るに、第一に活用の種類である。文語の動詞には正格活用として、四段・上一段・下一段・上二段・下二段の五種、變格活用として、加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格の四種存在するが、口語になるとその種類がおほいに減じて、正

格活用には四段・上一段・下一段の三種、變格活用には加行變格・佐行變格の二種になつて居る。すでに述べた通、九州地方にはなほ上二段活用と下二段活用に保存して居るところがあるが、東京語としては以上の五種に減少したのである。つまり文語の上二段と下二段が、口語では上一段と下一段にかはり、文語の奈行變格と良行變格が、口語では四段にかはつたのである。また名詞や漢語を動詞に用ゐるときに、文語ではすべて佐行變格に轉ずるのであるが、口語では地方により人により語によりて區々であることは、すでに述べた通である。ゆゑに活用の種類が文語と口語の間において少からざる相違があるわけである。つきに活用形について見ても、その間に種々の相違がある。文語では第一活用形が假定で、第五活用形が既定であるが、口語になると、假定と既定が同一の形式に變つてしまつた。すなはち第五活用形でこれ

をあらはすのである。たとへば文語では、

雨降^レラ^バ延期セム。

差支^アラ^バ断ラム。

といふ形式と、

雨降^レバ行カズ。

差支^アレ^バ断ル筈。

といふ形式との間に區別があるが、口語では、この二つ形式を左のごとく第五活用形であらはして居る。

雨降^レバ延期スルダラウ。

雨降^レバ行カナイ。

差支^ガア^レバ断ルダラウ。

差支^ガア^レバ断ル筈ダ。

またつぎのやうな形式でこれを言ひあらはすこともある。

雨降^ルト延期スルダラウ。

雨降^ツタ^ラ行カナイ。

差支^ガア^ルト断ル筈ダ。

差支^ガア^ツタ^ラ断ルダラウ。

これらの形式が將然か既然か、あるひは假定か既定かは、前後の關係によつて判斷されるわけである。

つぎに第三活用形と第四活用形とが、すべての口語動詞を通じて同一の形式であることも、文語の動詞に比較して異なる著しい點である。

文語の動詞では、四段上一段下一段に屬する動詞の第三活用形終止形と

第四活用形連體形とはまつたく同一で、その他の動詞におけるものはそ

れと異なるのであるが、口語の動詞はすべてを通じてこの形式が同じである。つまり口語動詞の活用形はそれだけ文語におけるものに比して簡單になつたのである。

命令をあらはす形式は、文語では四段活用以外の動詞に對して「ヨ」を結びつけてあらはすことになつて居るが、口語では四段活用以外の動詞に對して「ヨ」「ロ」「イ」を結びつけてあらはすやうになつて居るし、なほこの外いろくゝな形式が発達して居ることも一の特色である。(三十頁三十一頁參照)

第三節 形容詞

形容詞について文語におけるものと口語におけるものとの相違を見るに、その著しいものは動詞における場合とおなじくやはり活用の點に存在する。文語の形容詞には久活用と志久活用と存在するが、口語においてはこの兩種の活用を區別して立てる必要がなくなつたのである。なぜかといふとさきに擧げた形容詞の活用表について見る

通すべての形容詞がク・イ・ケレと活用するからである。文語の形容詞には久活用と志久活用の二種あつて、

久活用 善ク 善キ 善シ 善ケレバ

志久活用 悲シク 悲シキ 悲シ 悲シケレバ

といふやうにこれを獨立させる必要のあるのは、終止形すなはち善シ・悲シの特色にあるのである。つまり、この二種の形式を相對照すると、終止形は善シ、悲シシであるべき筈であるのに、兩ながら同一の形式になつて居るから、これを區別する必要があるわけである。しかるに、口語における用例を見るに、

善ク 善イ 善イ 善ケレバ

悲シク 悲シイ 悲シイ 悲シケレバ

と活用するから、もはや二種の活用を區別する必要がないのである。

また文語では第二活用形と第三活用形が異なるのであるが、口語ではそれがすべて同一の形式を取るやうになつたことも、兩者の間における大なる相違である。

つぎに第二活用形連體形と第三活用形終止形とが同じ形式に變化したことも、文語における形容詞に比して異なる著しい點である。第一活用形副詞形またはと第四活用形已然形とは、文語では善クバ・悪シクバと善ケレバ・悪シケレバといふやうに區別があるが、口語ではこれを一つにして善ケレバ・悪シケレバとあらはすことも、やはり動詞における場合と同じである。

なほをはりに形容詞について一の注意すべきことは、すでに述べた通、口語の形容詞は語形上十種ばかりあつて、(三十三頁三十四頁参照)これが地方によつていろいろに慣用せられて居るから、この點については話方や綴

の教授上特に重を置く必要がある。また準形容詞として列擧した八種の語彙も、地方によつて種々の用例があるから、國語教授上細心の留意を要する。つまり文語に比すると、口語の形容詞には種々の語彙と用例が發達して居るから、つねに標準語によつてこれを練習するやうに注意しなければならん。

第四節 助動詞

文語における助動詞は、廣日本文典によると所相・勢相・使役相・指定・打消過去・未來・推量・詠歎・比况等である。しかるに口語においても詠歎・比况の外これらの助動詞は大抵存在して居る。しかるにその内容に至てはおほいに變化して居るので、たとへば過去の助動詞のごときはツ・ヌ・タリ・セリ・ケリ・キ・タリ・ケリ・タリ・キ・ニケリ・テキ・ニキ等種々の形式が發

達して居るが、口語では「タ」一つになつてしまつた。比況のゴトシ、指定のベシ、使役のシメ、推量のメリ、打消のジも消滅した。要するに口語の助動詞は、文語におけるものに比較して、その内容がいちじるしく變つて居るのは明な事實である。それは過去の助動詞について見ても明であるが、ことに敬語の助動詞を見るとその相違の著しいことが分る。一體文語における敬語の助動詞は可能のル・ラル、使役のス・サス・シム等でこの外給フ・オ座ス・侍リを助動詞のごとく用ゐて敬意をあらはすことがある。しかるに口語においては可能の助動詞を用ゐて敬意を表示することは文語と同様であるが、使役の助動詞は敬語としてまつたく用ゐられない。下サル・ナサルを助動詞のごとく用ゐてオ書キナサル、オ出下サルと言ひあらはすことがある。このナサル・クダサルは四段に活用するのが慣例であるが、その第二活用形^{連用}に、

オ書キナ[、]サイ[、]イマス。
 オ書キナ[、]サツ[、]テイ[、]ラツ[、]シヤイマス。
 オ書キナ[、]サレマス。
 オ尋ネ[、]クダ[、]サイ[、]イマス。
 オ尋ネ[、]クダ[、]サツ[、]テ[、]モ駄目デス。
 オ尋ネ[、]クダ[、]サレ[、]マスカ。

といふやうな種々の形式が混成して居る。もつともその中のナサレマス・クダサレマスは下一段活用の系統に屬するもので、東京地方ではあまり用ゐられない。ナサイを結びつける場合には、その動詞に「オ」を冠らせるのが例であるが、この「オ」を省くのは方言的の慣用である。敬意をあらはし、あるひは丁寧に言ひあらはす場合に、普通マスを附け加へるのであるが、この助動詞はつぎのごとく不規則な活用を有する。

	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第五活用形	第六活用形
マス	マセ	マシ	マス	ママス マムス	マムスレ	マムシセ

なほこのマスの外、指定の助動詞デス・ノデス・デアリマス・ノデアリマス・デゴザイマス・ノデゴザイマスも敬意を表彰するわけであるが、これによつて思想を發表するには過去・現在・未來とその肯定・否定との六つの形式を知らなければならぬ。

ゴザイマス	ゴザイマシタ	ゴサイマセウ
ゴザイマセン	ゴザイマセンデシタ	ゴザイマセンデセウ
デアリマス	デアリマシタ	デアリマセウ
デアリマセン	デアリマセンデシタ	デアリマセンデセウ

しかるにデスにはデス・デシタ・デセウがあるが、その打消の形式がないから、アリマスの打消形を代用するわけである。地方の學校でしばし

ば聞くナイデアリマスはいはゆる學校言葉で、アリマセンといふ標準語のあるのを知らないために誤用されて居るのである。またデスとデアリマスとの用法についても、標準語における慣用と異なることがしばしば、地方において氣付かれる。すなはちデスは普通に對話の場合に慣用せられ、デアリマスはおほく演説や講義の際に慣用せられるので、東京語においては、その間に判然たる區別があるが、地方においてはしばしば、對話の際デアリマスを用ゐて居る。兵卒が上官に對して應答するとき、この形式を用ゐる慣例になつて居るので、それらの關係から學校方面でもこれを使ふやうになつたのであるかとも思はれるが、とにかく對話の際にデアリマスをしばしば使用すると、自然切口上になつて情味が薄くなるやうな感じがする。

つぎに助動詞の活用形にも、動詞や形容詞の場合におけるがごとく、

やはり同じやうな變化が生じて居る。たとへば受身・可能・使役の助動詞は文語では下二段に活用するが、口語では下一段に變つて居る。希望のタイや推量のラシイは形容詞とおなじやうに變つて居る。たゞし口語の助動詞にはマスのごとく不規則に活用するものもあるし、過去のタ、指定のダのごとく動詞や形容詞とまつたく異なる活用を有するものもある。すなはち

過去テ タ タラウ

指定デ ダ ダラウ

と活用するが、かういふやうに活用する類例は他にない。

第五節 助詞

口語における接續詞・副詞・感動詞は文語に比すると、その内容・實質に

少からざる相違があるが、さらに助詞を見るとその點における相違が一層甚しい。助詞の種類を見るに、文語におけるものにしてすでに口語では用ゐられなくなつたものもあり、また口語においてあらたに發達したものもある。つぎにそのおのづかについて用例を見ると、文語よりもはるかに簡單になつて居る。たとへば「ヤ」の用例を見るに、詞の玉緒に載つて居るものが約二十數個條あるが、口語においてはわづか數ヶ條しか用ゐられないやうになつた。その他文語に比して用例のはるかに減じて居るものが少くない。文語では「ニ」と「へ」の區別を立てて居るが、口語ではほとんど區別なく用ゐられる。すなはち

オ車、ニオ召、ニナリ、マスカ。

電車、へ乗リ、マスカ。

東京、ニ行ツタコト、ガアルカ。

京都へ行クノニ何時間カ、リマスカ。

といふやうに用ゐられて、その間に區別がない。

つぎに「ヨリ」は比較の場合に用ゐられることが口語にもあるが、動作の標準を示す場合にはいつも「カラ」を用ゐるのが口語の例である。

コノ寫眞ハ友人カラ送ッテ來タ。

東京カラ人ガ來ル筈ダ。

猿ガ木カラ落チタ。

また範圍を示す場合にも、

東京カラ下關マデ急行デ行ク。

コ、カラソコマデ幾ラアルカ。

何カラ何マデヨク出來テ居ル。

といふやうに、やはりヨリと言はないでカラを用ゐる。このヨリとカラの關係が文語と口語の間における著しい相違である。「ノ」が主格を

示す場合は口語においてまつたく消滅した。ゆゑに

時雨ル、空ニ雁ノ啼クナリ。

生駒ノ嶽ニ雲ノカ、レル。

といふやうな例の「ノ」は、いつも「ガ」と口譯すべきである。用言にガ・ハラ・ニ・ト・モ等が結びつく場合には、その間に「ノ」を挿入して「ガ・ノ・ハ・ノ・ヲ・ノ・ニ・ノ・ト・ノ・モ」と用ゐることが、今日一般の慣用になつて居る。たとへば

芝居ヲ見ルノ、ガ何ヨリ樂ミダ。

長崎へ行クノ、ハ來月ニナルダラウ。

オ母サンニ逢フノ、ヲ樂ミニシテ居マス。

名古屋へ行クノ、ニ中央線モチヨット面白イデセウ。

相撲ヲ見ルノ、トドチラガ宜イカ。

といふやうに用ゐられるが、一體口語では「ノ」がいろくゝの助詞と結びつく性質を有して居る。ゆゑに普通文の教材を口譯する際に、これら

の關係にふかく注意しなければならん、

つぎに普通文と口語文との關係から、特に助詞の用例に注意すべきことは、文語の助詞から變化したものに對してである。すなはち文語のニテが口語では左のごとくデになるし、

コノ本ハ神田ニテ買ヒ求メタリ コノ本ハ神田、デ買ヒ求メタ。

彼ハ田舎ニテ育チタレバ至極壯健ナリ 彼ハ田舎、デ育ッタカラ至極壯健ダ。

舟ニテ保津川ヲ下ル。 舟、デ保津川ヲ下ル。

火ニテ炙ル。 火、デ炙ル。

講義ハ一週間ニテ終ラム。 講義ハ一週間、デ終ルダラウ。

頭ハ人ニテ身ハ魚ナリ。 頭ハ人、デ身ハ魚デアル。

また文語のトモが口語ではテモになる。

タトヒ雪降ルトモ中止スルコトナシ タトヒ雪ガ降ツテモ中止スル ーリナイ。

勉強ストモ及第覺束ナカラウ。 勉強シテモ及第覺束ナカラウ

飲メドモ醉ハズ。 飲ンデモ醉ハナイ。

聞ケドモ聞エズ。

聞イテモ聞エナイ。

以上は文語における助詞と、口語における助詞との間における主要な相違を述べたのであるが、なほこれらの相違についてあらかじめ研究して置かなければ、普通文の教材を文法から見て非難のないやうな口譯を行はせることが困難である。小中學を通じて普通文の教材を口譯することが一般に行はれて居るが、それにも拘らずわれゝの豫期して居るやうな成績の擧らないのは、要するに文語法と口語法との關係をよく會得して、口譯を指導することを心掛けない結果に外ならんと信ずる。ことに助詞には種々の方言が存在するのであるから、教授者はこれも一通心得て居る必要がある。カラといふ助詞についてバツテン・サカイといふやうな方言が存在するが、やゝもするとそれらの地方における學童は、コンナ事情もアリマシタカラ、成功致シマセン

デシタ。といふやうな語句の意味を了解し得ないこともしばくあると聞いて居るが、さすれば口譯は一層困難なわけで、教授者はかれらを指導する上に細心の留意を有するものと思ふ。

第六節 餘論

以上は品詞について文語と口語の間における相違を述べたのであるが、なほ文章法すなはち措辭についても、文語と口語の間に多少の相違がある。たとへば文語で、

鳥飛ブ 雨降ル 風吹ク 花咲ク 川淺シ

といふやうに、助詞の補助を借らずして名詞が主語になるのであるが、口語では

鳥ガ飛ブ 雨ガ降ル 風ガ吹ク 花ガ咲ク 川ガ淺イ

のごとくつねに助詞を附け加へる。文の構成等については、あまり差異がないにしても、なるべく口語を簡潔平明に書き綴るために、種々人爲的に洗煉修琢を加へる必要があるところから、口語文に多少普通文の法格を斟酌しなければならんことがある。したがつて兩者の關係をよく會得して置く必要を生ずるのである。つまり口語文は冗漫に流るゝ傾があるから、これを緊縮した文章に書き綴るには、文の構成について種々の新しい工夫を要するが、これまでこれらの研究が一般に幼稚であるのはなほ遺憾である。ゆゑに將來國語教育上これらの研究をおほいに奨励する必要ありと信ずる。

實用口語法 終

東京高等師範學校教授兼 東京帝國大學文科大學助教授 文學士 保科孝一先生著

國語教授法精義

國語を教ふるは難事に非ず唯生ける國語を教ふるが難事なるのみ。殊に今日の國語は其の生命に發洩たる活氣を加へて脈膊し呼吸し而して成長す。故に今日の國語を教授するものは國語の生理を會得して然る後に其の策を講ぜざるべからず。保科先生は明治以來國語問題の耆宿なり、國語の生理に精通せらるる事今日何人の越ゆるを許さず。本書が國語教授の心髓に觸れて讀者をして思はず案を拍たしむるものあることを言をまたず。

第一編 總論	第一章 國語教育の目的	第二章 直觀教材について
第二章 國語教育の價値	第三章 國語教育と言語教育	第三章 直觀教材について
第四章 國語教育の標準	第四章 國語教育と國語問題	第四章 直觀教材について
第五章 國語教育の基礎	第五章 國語教育の基礎	第五章 直觀教材について
第六章 國語教授の基礎	第六章 國語教授の基礎	第六章 直觀教材について
第七章 國語教材論	第七章 國語教材論	第七章 直觀教材について
第八章 國語教材論	第八章 國語教材論	第八章 直觀教材について
第九章 國語教材論	第九章 國語教材論	第九章 直觀教材について
第十章 國語教材論	第十章 國語教材論	第十章 直觀教材について
第十一章 國語教材論	第十一章 國語教材論	第十一章 直觀教材について
第十二章 國語教材論	第十二章 國語教材論	第十二章 直觀教材について
第十三章 國語教材論	第十三章 國語教材論	第十三章 直觀教材について
第十四章 國語教材論	第十四章 國語教材論	第十四章 直觀教材について
第十五章 國語教材論	第十五章 國語教材論	第十五章 直觀教材について
第十六章 國語教材論	第十六章 國語教材論	第十六章 直觀教材について
第十七章 國語教材論	第十七章 國語教材論	第十七章 直觀教材について
第十八章 國語教材論	第十八章 國語教材論	第十八章 直觀教材について
第十九章 國語教材論	第十九章 國語教材論	第十九章 直觀教材について
第二十章 國語教材論	第二十章 國語教材論	第二十章 直觀教材について
第二十一章 國語教材論	第二十一章 國語教材論	第二十一章 直觀教材について
第二十二章 國語教材論	第二十二章 國語教材論	第二十二章 直觀教材について
第二十三章 國語教材論	第二十三章 國語教材論	第二十三章 直觀教材について
第二十四章 國語教材論	第二十四章 國語教材論	第二十四章 直觀教材について
第二十五章 國語教材論	第二十五章 國語教材論	第二十五章 直觀教材について
第二十六章 國語教材論	第二十六章 國語教材論	第二十六章 直觀教材について
第二十七章 國語教材論	第二十七章 國語教材論	第二十七章 直觀教材について
第二十八章 國語教材論	第二十八章 國語教材論	第二十八章 直觀教材について
第二十九章 國語教材論	第二十九章 國語教材論	第二十九章 直觀教材について
第三十章 國語教材論	第三十章 國語教材論	第三十章 直觀教材について
第三十一章 國語教材論	第三十一章 國語教材論	第三十一章 直觀教材について
第三十二章 國語教材論	第三十二章 國語教材論	第三十二章 直觀教材について
第三十三章 國語教材論	第三十三章 國語教材論	第三十三章 直觀教材について
第三十四章 國語教材論	第三十四章 國語教材論	第三十四章 直觀教材について
第三十五章 國語教材論	第三十五章 國語教材論	第三十五章 直觀教材について
第三十六章 國語教材論	第三十六章 國語教材論	第三十六章 直觀教材について
第三十七章 國語教材論	第三十七章 國語教材論	第三十七章 直觀教材について
第三十八章 國語教材論	第三十八章 國語教材論	第三十八章 直觀教材について
第三十九章 國語教材論	第三十九章 國語教材論	第三十九章 直觀教材について
第四十章 國語教材論	第四十章 國語教材論	第四十章 直觀教材について
第四十一章 國語教材論	第四十一章 國語教材論	第四十一章 直觀教材について
第四十二章 國語教材論	第四十二章 國語教材論	第四十二章 直觀教材について
第四十三章 國語教材論	第四十三章 國語教材論	第四十三章 直觀教材について
第四十四章 國語教材論	第四十四章 國語教材論	第四十四章 直觀教材について
第四十五章 國語教材論	第四十五章 國語教材論	第四十五章 直觀教材について
第四十六章 國語教材論	第四十六章 國語教材論	第四十六章 直觀教材について
第四十七章 國語教材論	第四十七章 國語教材論	第四十七章 直觀教材について
第四十八章 國語教材論	第四十八章 國語教材論	第四十八章 直觀教材について
第四十九章 國語教材論	第四十九章 國語教材論	第四十九章 直觀教材について
第五十章 國語教材論	第五十章 國語教材論	第五十章 直觀教材について

菊判函入美裝全壹冊
總頁數七百參拾頁
定價金貳圓參拾錢
郵稅金貳圓貳拾錢

大正六年七月二十日印
大正六年七月二十三日發

行 刷

定價金 四拾錢



實 用 口 語 法

著 者 保 科 孝 一
東京市麹町區土手三番町三十六番地

發 行 者 會 社 資 育 英 書 院
東京市牛込區白銀町貳拾番地

右 代 表 者 目 黑 甚 七
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 者 青 柳 十 一 郎

所 刷 印
場 工 一 第 舍 英 秀

發 行 所

東京市牛込區白銀町貳拾番地
振替口座(東京)七四二番
東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

發 賣 所

會 社 資 育 英 書 院

東京高等師範學校教授兼 文學士 保科孝一先生主幹
東京帝國大學文科大學助教授

國語教育

▲毎月一回一日發行 大正五年一月一日初號創刊

壹冊 定價金貳拾五錢(郵稅五厘)
六冊 定價金壹圓五拾錢(郵稅共)
十二冊 定價金貳圓八拾錢(郵稅共)

口繪、挿畫

主として國語讀本の教材に關し或は歐米に於ける各小中學校教科書等より或は直觀掛圖・寫眞等より優秀なるものを選択して精巧なる寫眞版若くは凸版として挿入し國語教授上の資料たらしむ。

主 張

國語教育上に於ける重要な問題につき主幹の卓拔なる意見犀利なる批判を發表する。朝野知名の學者および教育家の國語教育に關する高論卓説を紹介する。

論 說

専ら力を國語讀本の教材研究に注ぎ、其是非を究め、補充教材の利害を論じ、猶綴り方教材・話方教材・直觀教材・文法教材・書取及假名遣教材・書き方教材等に關する最も權威ある研究を載せる。

教材の研究

讀本教材の取扱に關し或は發音の矯正言語の練習につき或は直觀教授・綴り方教授・文法教授・書方教授・假名遣教授・文法教授の實際につき最も嶄新にして權威ある經驗と方法を紹介する。

教授の實際

國語問題の解決につき朝野知名の學者識者及び教育家の意見を紹介し研究上有力なる參考資料を供給する。

國語問題

國語教育及教授上の參考資料のみならず猶各種の調査事項編輯員の訪問記參觀國語教育及教授に關する内外思潮質疑應答等を掲載し斷片小章すらも讀者の知囊を豊富ならしむること注意する。

彙 報

時事、新刊紹介、編輯だより。時に言語學・聲音學・國學及び國語教授法等の通俗講話を掲げ、時に有益にして興味ある參考資料を添へ、時に口語及び口語法に關する研究教材等を載せる。

附 錄

時に言語學・聲音學・國學及び國語教授法等の通俗講話を掲げ、時に有益にして興味ある參考資料を添へ、時に口語及び口語法に關する研究教材等を載せる。

國語話方號

第貳卷第四號 百七拾四頁
本號に限り
定價金參拾五錢(郵稅二錢)
大正六年四月一日發行

■ 概前の大演説……ロイドジョージの大演説(口繪)	文部省普通學務局長 赤司鷹一郎
■ 話方教授の目的と意義……	東京高等師範學校校長 嘉納治五郎
■ 小學校に於ける話方教授の目的及方法に關する法令上の見解……	文部省督學官 榎山榮次
■ 話方練習の必要……	新潟縣高田師範學校教諭 平野秀吉
■ 話方教授に關する私見……	兵庫縣立龍野中學校教諭 富田佐一
■ 綴方より見たる話方……	奈良女子高等師範學校訓導 花田甚五郎
■ 中小學校の話方に就て……	廣島高等師範學校訓導 駒村徳壽
■ 低學年に於ける話方教授……	東京女子高等師範學校訓導 岡井二良
■ 話方教授に就て……	東京女子高等師範學校訓導 久留島武彦
■ 吾が話方教授綴方即話方……	東京女子高等師範學校訓導 五味義武
■ 兒童へ對する御話の仕方……	東京高等師範學校教授 岡倉由三郎
■ 話方の方法……	文部省圖書官 森岡常藏
■ 發表の修練と話方教授……	東京高等師範學校教授 乙竹岩造
■ 話方教授について心づける事ども……	東京高等師範學校訓導 山田義直
■ 話方に關する私見……	東京高等師範學校教諭 玉井幸助
■ 話方教授を更に重ぜよ……	東京高等師範學校教諭 保科主幹
各府縣師範學校附屬小學校に於ける話方の狀況	
■ 話方教授經驗談……	東京高等師範學校訓導 山田義直
■ 英米に於ける話方の概況……	東京高等師範學校教諭 玉井幸助
■ 獨佛英の話方教授……	東京高等師範學校教諭 保科主幹
■ 國語研究會夜話……	東京高等師範學校教諭 保科主幹

東京高等師範學校教授 佐々政一先生 共編
東京高等師範學校訓導 蘆田惠之助先生

小學讀み方辭典

裝幀優美總クロス 定價金六拾五錢
製本 堅牢 郵税金八錢

■自學自習、これ教授至極の境地、兒童をしてこの境地に至らしむるには適當なる辭書を缺くべからざるは多言を要せず。
■從來の辭書は専ら讀み方に偏せるは遺憾なりとす、本書が讀み方の外に綴り方をも顧慮したることは新らしい試みなり。
■小學校全教科書中の語は固有名詞をも網羅して之に國民日常必要な語を加ふ。したがつて語數の多きこれまた本書の一特色なり。

東京高等師範學校教諭 玉井幸助先生 著
東京高等師範學校訓導 芦田惠之助先生 著

兒童圖書館叢書

四六版美裝 定價金貳拾錢
每月一冊發行 郵税金六錢

○初等教育界近年の趨勢が、著しく自學を尊重するやうになつた。かゝる趨勢の自然の要求として、全國各地の小學校は兒童圖書館を設置し盛に兒童自學の便を工夫計畫してゐる。
○然るに兒童圖書館の設置にして、之に備ふべき適當の書籍の乏しいのを歎かないものはない。弊院深く之をなげき、左の叢書を發行することゝなつた。

綴り方十二ヶ月

大正七年一、三、五、七、九、十一の六ヶ月

大正八年二、四、六、八、十、十二の六ヶ月

大正七年二、四、六、八、十、十二の六ヶ月

大正八年一、三、四、七、九、十一の六ヶ月

話し方十二ヶ月

東京高等師範學校訓導 蘆田惠之助先生 新著

讀み方教授

四六判全一冊 定價金壹圓卅五錢
總クロス 郵税金八錢

蘆田先生の國語教授に於ける實際的技能は天下の等しく認むる所、而も先生の技能は所謂天才の技巧に非ずして實に二十有五年間の熱誠なる經驗の賜なり。
今や其の經驗に立脚して讀み方教授の方法を説かる。實際教授の任に當つて朝夕其の方案に苦心せらるゝの士は來つて本書に諮り給へ。

綴り方教師の修養

四六判全一冊 定價金壹圓卅五錢
總クロス上製函入 郵税金八錢

■當今綴り方教授界の情勢如何。甚だ現代の思潮に似たり。教授の方法に苦慮して、而かも安心の境を得ず。新らしき生命を望んで、亦之を捕ふる能はず。悶々の情や自暴自棄に傾からんとす。
■誰の書を読むも觸れず、誰の説を聴くも亦悟る能はず。觸るゝ書を與へよ。悟るべき道を教へよ。とは綴り方教授研究者の聲ならずや。

綴り方教授

四六判全一冊 定價金壹圓卅五錢
總クロス上製函入 郵税金八錢

■本書出でて滿三年、版を重ねる拾貳、いかに當代綴り方教授の研究に資する所多きかを知るに足らん。
■本書は綴り方教授の方法に關して特に詳説せり。いづれも著者が多年經驗研究によるものにして教壇上に於ける教師及び斯道研究者の指針なり。

東京高等師範學校教授文學博士 佐々政一先生著

新撰記事文講話

四六判全一冊 定價金八拾五錢
箱入總クロス製 郵税金八錢

新撰叙事文講話

四六判全一冊 定價金壹圓
箱入總クロス製 郵税金八錢

世に所謂作文書なるものは汗牛充棟も當ならざる程ある。只漫然として文則を樹てるのみであるからして、個々の法則そのものの間に、渾然たる融合統一の致を缺いて、混然雜然、文則を世記するのみで、その結果讀者の頭に何等纏つた作文法に關する信念を與へない。加之、これが例文として示す所も、その選擇極めて蕪雜であつて、無批判に文則を轉載して居るに過ぎぬのである。

斯道の大家たる佐々博士茲に見る所あり、先づ作文法に關する根本的基礎たる科學的通則を詳説し、樹つる所の文則をして、彼是共に融合統一せしめ、且つ、其の結論に適へる古今名家の作例數十篇を挙げ各文例について、一々詳細なる批評及解説を附して、専ら斯道研究家の實際的指導に資せんと企てたるものが本書である。

近代文藝雜話

四六判全一冊 定價金九拾錢
箱入總クロス製 郵税金八錢

醒雪博士、その蘊蓄を傾倒して、或は文體より、思想より、或は趣味より、風俗より、江戸三百年の文藝を縦横に評論せらる。時に溯つて萬葉源氏、謡曲の古に及び、時に降つて綠雨、子規、樽牛漱石の今に及ぶ。或は個人を評し、或は時勢を論じ、或は俳諧の修辭を説き、歌舞伎の構造を論じ、或は馬琴を罵り、近松を嘲る。立論斬新、總て一家の創見にして、しかも皆嚴正なる史的討求に基く。其の文或は奔放不羈、或は輕妙洒脫、他の學究的著作の類に非ず。文藝研究者と江戸趣味の愛者は、こゝに好箇の參考資料を得べし。

327
1001

3



終